

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1450集

博 多 183

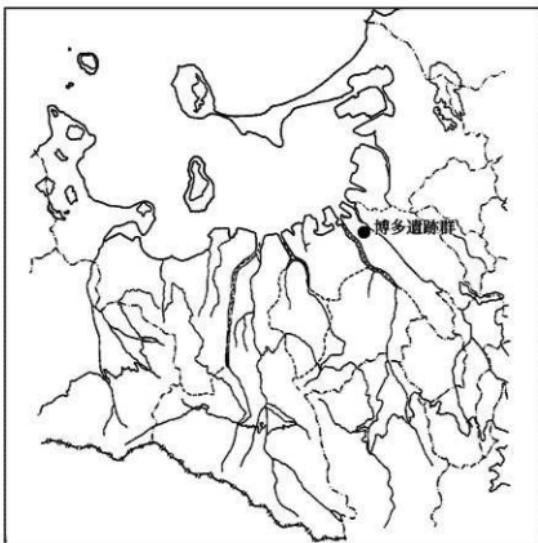
— 博多遺跡群 第228次調査報告 —

2022

福岡市教育委員会

HAKA TA
博 多 183

— 博多遺跡群 第228次調査報告 —



遺跡略号 HKT-228

調査番号 1905

2022

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。本市では、近年の著しい都市化の中でやむなく失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存を行うことによって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴って実施された博多遺跡群 第228次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、中世から近世・近代にかけての井戸や石積土坑をはじめ多くの遺構が確認され、また多種多様な輸入陶磁器・国産陶磁器類も出土し、この地で先人達の生活が連綿と続いている様子を知ることができました。これらは、地域の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業および本報告書の作成に至るまで、事業主であるボンスマム株式会社様をはじめ関係者の皆様には様々な面でご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、共同住宅建設に伴って、福岡市博多区中呉服町183番で福岡市教育委員会が実施した、博多遺跡群第228次調査の報告書である。調査は平成31(2019)年4月22日から令和元年(2019)6月25日にかけて実施し、整理・報告書作成は令和2・3年度を行った。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は、調査担当の吉田大輔が作成した。
5. 本書に掲載した遺物の実測図は、池田晃子、立石真二、林田憲三、久富美智子、平田晴美、吉田が作成した。遺物の写真撮影は吉田が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は、池田、久富、林由紀子、吉田が行った。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北から $7^{\circ}20'$ 西偏する。
8. 調査で検出した遺構については井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、性格不明遺構をSXとし、遺構の種別に関わらず01から始まる通し番号を付した。
9. 本書に関わる記録類・遺物等の資料については、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。活用されたい。
10. 本書の執筆にあたり、以下の文献等を参考にした。
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』
中世土器研究会編 2001『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
森田勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
森本朝子・片山まび 2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』8
太宰府市教育委員会 2000「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」『太宰府の文化財』第49集
11. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第228次	遺跡略号	HKT-228
調査番号	1905	分布地図幅名	089 千代博多	遺跡登録番号	0121
申請地面積	274.27m ²	調査対象面積	359.47m ²	調査面積	160m ²
調査期間	平成31(2019)年4月22日~令和元(2019)年6月25日			事前審査番号	30-2-754
調査地	福福岡市博多区中呉服町183番				

目次

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の記録	4
1. 概要	4
1)調査の経過	4
2)調査の概要と基本層序	6
2. 遺構と遺物	8
1)近世～近代の遺構と遺物	8
(1)土坑(SK)	8
2)中世の遺構と遺物	17
(1)土坑(SK)	17
3)検出面および遺物包含層の出土遺物	31
IV. 結語	33

挿図目次

第1図 博多遺跡群および周辺の遺跡(1/30,000)	3
第2図 調査地点の位置(1/1,000)	3
第3図 調査区の配置(1/200)	4
第4図 第1面遺構全体図(1/100)	5
第5図 第2面遺構全体図(1/100)	6
第6図 SK17 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、7～9は1/4)	7
第7図 SK17 出土遺物(1/3、21～27は1/4)	8
第8図 SK55 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、29は1/4)	9
第9図 SK57 実測図(1/40) および出土遺物(1/3)	10
第10図 SK57 出土遺物(61は1/4、62～67は1/1)	11
第11図 SK77 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、76～81は1/4)	12
第12図 SK142 実測図(1/40) および出土遺物(1/3)	14
第13図 SK142 出土遺物(1/3、123～126は1/4)	15
第14図 SK62 実測図(1/40) および出土遺物(1/3)	16
第15図 SK78 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、136・137は1/4)	17
第16図 SK114 実測図(1/40) および出土遺物(1/3)	17
第17図 SK137 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、146は1/4)	17
第18図 SK28・31、SP29・30・32実測図(1/40)	18
第19図 SK28 出土遺物①(1/3、155～165は1/4)	19

第20図 SK28 出土遺物②(1/3、174は1/4).....	20
第21図 SK31 出土遺物(1/3、177は1/4).....	20
第22図 SK43 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	21
第23図 SK146 実測図(1/40) および出土遺物(1/3)	21
第24図 SK09 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	22
第25図 SK115 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	22
第26図 SK123 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	23
第27図 SK150 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、202は1/1).....	23
第28図 SK138 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、208は1/1).....	23
第29図 SK103・104実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	24
第30図 SK107 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	24
第31図 SK48 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	25
第32図 SK87 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	25
第33図 SK152 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	25
第34図 SK151 実測図(1/40) および出土遺物(1/3).....	25
第35図 SK63 実測図(1/40) および出土遺物(1/3、243・244は1/4、254は1/1).....	26
第36図 SK154 実測図(1/40) および出土遺物①(1/3).....	27
第37図 SK154 出土遺物②	28
第38図 検出面の出土遺物(1/3)	29
第39図 遺物包含層の出土遺物① (1/3).....	30
第40図 遺物包含層の出土遺物② (1/3、362・363は1/4).....	31
第41図 遺物包含層の出土遺物③ (1/4).....	32

写真図版目次

写真図版 1	写真14 I区第1面 SK63 完掘状況(北西から)
写真 1 調査区全景 I区第1面(東から)	写真15 I区第1面 SK62(南東から)
写真 2 I区第1面 近景(東から)	写真図版 5
写真図版 2	写真16 I区第1面 SK62(南西から)
写真 3 I区第2面 近景(東から)	写真17 I区第1面 SK62(北西から)
写真 4 I区第2面 近景(北西から)	写真18 I区第2面 SK87 土層断面(南西から)
写真図版 3	写真19 I区第2面 SK87 完掘状況(南西から)
写真 5 調査区北壁土層(南西から)	写真20 II区第2面 SK154(東から)
写真 6 調査区全景 II区第2面(南西から)	写真21 II区第2面 SK154(北西から)
写真 7 調査区全景 II区第2面(東から)	写真22 II区第2面 SP136・SK138・SK137 検出状況(南西から)
写真図版 4	写真23 II区第2面 SK138 完掘状況(南西から)
写真 8 I区第2面 SX3 挖削状況(南西から)	写真図版 6
写真 9 I区第2面 SX3 下層(北東から)	出土遺物①
写真10 I区第2面 SK8 検出状況(東から)	写真図版 7
写真11 I区第2面 SK8 半截状況(東から)	
写真12 I区第2面 SK28・29・31,SP30・32 挖削状況(南から) 出土遺物②	
写真13 I区第1面 SK63 挖削状況(北西から)	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成30(2018)年11月2日付で、福岡市博多区中興服町183番(敷地面積:274.27m²)における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課宛てになされた(事前審査番号:30-2-754)。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていること、また照会地は過去にも照会を受け(事前審査番号:13-2-89)、その際に確認調査が実施されており、当時の地表面下約1.3~1.4mの暗褐色砂質土上および約1.5~1.6m下の黄灰色~黄細砂砂丘面上の2面の遺構面と井戸・土坑・柱穴・小穴等の遺構が検出され、敷地全体に遺構が広がっているものと判断されていた。

これらを受け、遺跡の保全等について申請者と協議を行った結果、今回の共同住宅建築工事による埋蔵文化財への影響が回避できないとして、敷地のうち埋蔵文化財が影響を受けると判断される155.23m²を対象として記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、平成31年(2019)年3月26日付で事業主体であるボンドマム株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成31(2019)年4月19日より発掘調査を、翌令和2年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。実際の発掘調査着手は、平成31(2019)年4月22日である。なお、変更契約を行い、令和3年度まで資料整理・報告書作成を実施した。

2. 調査の組織

調査委託 ボンドマム株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査:平成31年度(5月より令和元年度)・整理報告:令和2・3年度)

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人(元~3年度)

同課調査第2係長 大塚紀宜(元年度)

藏富士寛(2・3年度)

調査第1係長 吉武学(元・2年度)

本田浩二郎(3年度)

庶務 同文化財活用課 管理調整係 松原加奈枝(元・2年度)

内藤愛(3年度)

事前審査 同埋蔵文化財課 事前審査係長 本田浩二郎(元・2年度)

田上勇一郎(3年度)

同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎(元・2年度)

森本幹彦(3年度)

事前審査係文化財主事 朝岡俊也(元年度)

山本晃平(2~3年度)

調査担当 同埋蔵文化財課 文化財主事 吉田大輔

II. 遺跡の立地と環境

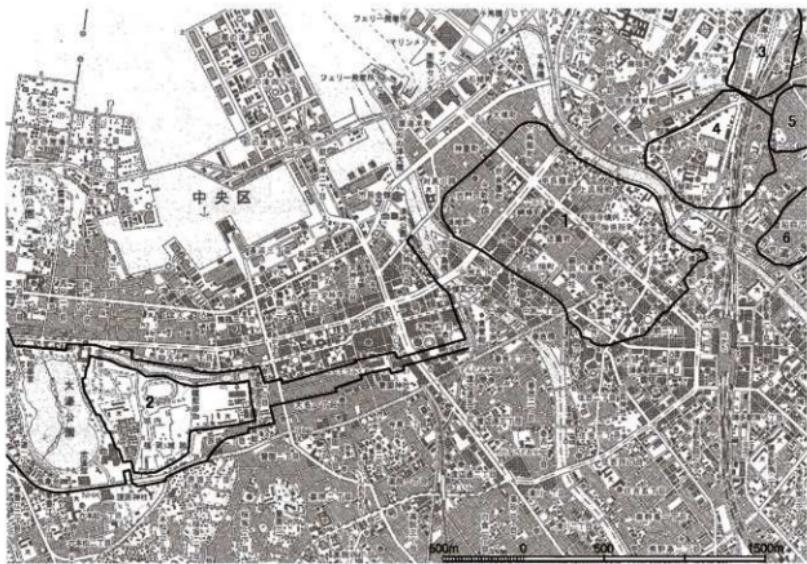
1. 地理的環境

博多遺跡群は、博多湾沿岸のほぼ中央に流入する那珂川と御笠川の河口部に形成された古砂丘上に立地する。遺跡群は南北に約1.5km、東西に約1.0kmの範囲が想定されており、弥生時代から近現代まで連続と人々の生活が続く複合遺跡である（第1図）。遺跡が立地する砂丘地形は、南から大きく三列から成ることが分かっている。砂丘列は内陸側から砂丘列Ⅰ（砂丘1）、砂丘列Ⅱ（砂丘2）、砂丘列Ⅲ（砂丘3）と仮称され、内陸側の砂丘1・2は現在の祇園町と呉服町交差点にかかる位置に相当し、海側の砂丘3は奈良屋町一帯に相当する。中世においては内陸部（砂丘1・2）を「博多濱」、海側（砂丘3）を「息ノ濱（沖ノ濱）」と呼んでいた。ちなみに現状における標高のピークは砂丘1相当地点が6.3m、砂丘2が5.1m、砂丘3が3.2mである。現在の「博多」の町並みは、この砂丘地形上に2~5m程度盛土がなされ、人工的な整地層によって形成されたものである。一見平坦であるが、本来は起伏のある砂丘列やその間に形成された小規模な谷間、緩やかな斜面など微地形がみられる地形であったことが発掘調査によても明らかとなっている。現在でも博多の町を歩いてみると、この埋没した旧地形の起伏を比較的よく反映していることが分かる。遺構の分布傾向をみると、弥生時代から古代の遺構は博多浜域にはほぼ限られる。息浜域は古代の遺構がわずかにみられるが、土地利用が本格化するのは中世以降である。これは砂丘形成あるいは陸化の時期差や都市域拡大の歴史的背景など、いくつかの要因によるものである。

2. 歴史的環境

今回、報告する第228次調査地は、博多遺跡群が展開する古砂丘のうち、最も海側に位置する「息浜」の東側に立地する。調査地の現在の標高は約4.9mで、中世段階には砂丘の東側斜面に位置し、東側に向かって傾斜していたと考えられる。この周辺は、戦後の町界町名整理まで「官内町」に属し、東の箱崎方面から石堂橋を渡って博多に入る場合の最初の町であった。町名の由来について、1765（明和2）年に黒田藩医津田元順・元貞親子が筑前国に関する古記録や当時博多に伝わっていた伝承等を記した『石城志』には、「いにしへ大宰府の官人此處に来りて守衛しければ、其の館の有し所を後世官内と名づけしなるべし」とある。

調査地の位置する「息浜」の土地利用が本格化するのは、中世以降であり、鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」に初めてその名がみられる。鎌倉時代2度の元軍の襲来によって、博多の町は灰燼に帰すか町はすぐに復興している。13世紀末に鎮西探題が博多に設置され、1316（正和五）年には月堂宗規が息浜に妙楽寺を建立する。南北朝時代頃から息浜は急速に発展し、博多の繁栄の中心は從来の博多浜から息浜へと移っていく。室町時代後半以降、筑前の少弐氏、豊後の大友氏、周防の大内氏らが博多の領有権を巡って度々争っており、町はそのたびに戦火を被った。1586（天正14）年には毛利軍と対峙した薩摩の島津軍によって焼かれ、またもや博多は灰燼に帰した。その翌年、九州平定を成し遂げた豊臣秀吉の命により、博多の町は箱崎の町とともに朝鮮出兵の兵站基地として復興される。中世段階の街区は地形に制約される部分が大きかったと考えられるが、このとき從来の街区が廃されて新たな道路が造られ、博多の町全体が長方形街区と短冊形地割で区切られた。いわゆる「太閤町割」である。現在の町並みも基本的にはこの町割を踏襲している。江戸時代になると、幕府の鎖国政策によって、対外交渉の窓口として長い歴史を誇った貿易都市博多はその役割を出島に譲ることとなる。黒田氏の入封後は、城下町福岡に対する商人の町博多として栄え、現在に至る。



第1図 博多遺跡群および周辺の遺跡(1/30,000)

1:博多遺跡群 2:福岡城跡・鴻臚館跡 3:古塚本町遺跡 4:堅粕遺跡 5:古塚祝町遺跡 6:古塚遺跡



第2図 調査地点の位置(1/1,000)

III. 調査の記録

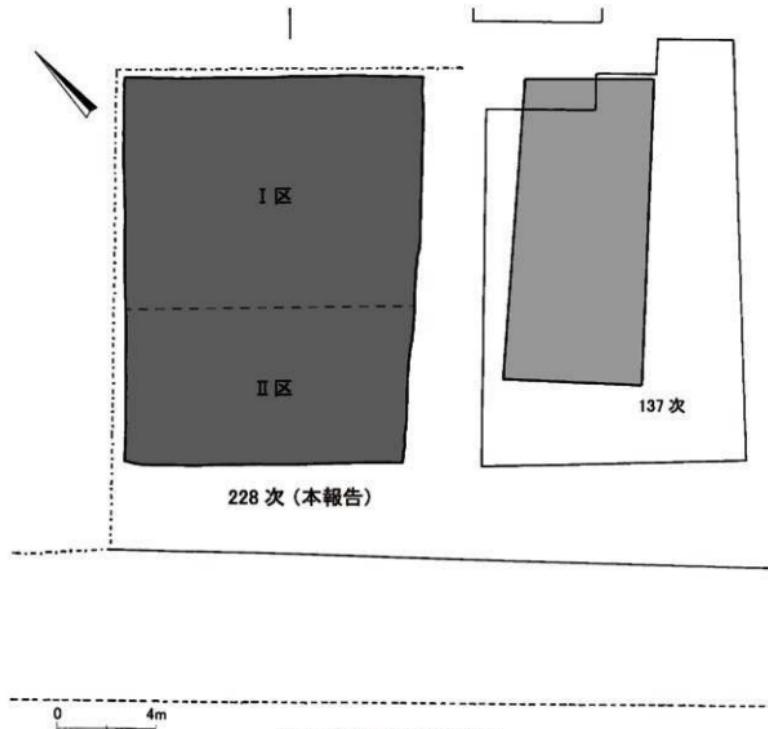
I. 概要

1) 調査の経過(第2・3図)

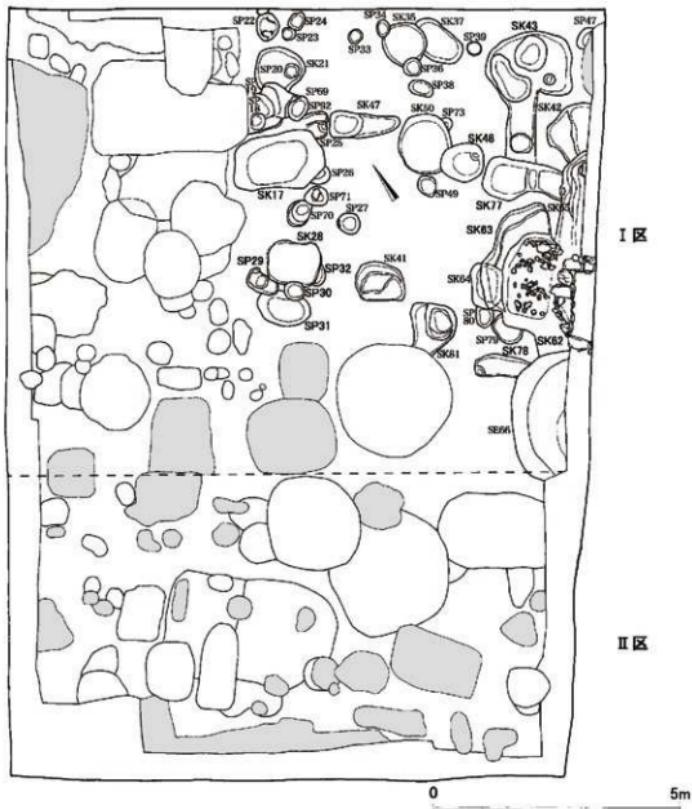
博多遺跡群第228次調査区は、博多区中呉服町183番に所在する(第2図)。調査前は駐車場で、調査前の地表面の標高は約4.9mである。調査の対象は「I.-1調査に至る経緯」に記したとおり、事業対象面積274.27m²のうち、共同住宅建設工事の影響を受ける155.23m²としたが、土留め範囲内で周辺の安全対策や作業上の安全確保を行った結果、実際の調査面積は160m²となった。

発掘調査は、平成31(2019)年4月22日に開始した。調査に際して、建設工事で使用する土留めの鋼矢板を前もって打設してもらい、調査中も土留めとして使用した。また、表土鋤取りとその排土搬出、さらに調査中の排土搬出を事業主側から現物提供いただいた。表土鋤取りは調査区全体について行ったが、排土の途中搬出までは場内で排土を処理する必要があり、調査範囲の北側1/2程度(I区)を先行して調査し、排土搬出後、残る南側1/2(II区)の調査を行うこととした(第3図)。

まず、重機による表土鋤取りを実施し、その後機材等の搬入や環境整備を行った。バックホウで地表下1.2~1.3cmまで掘り下げた標高約3.6~3.7mで確認できた褐色~褐灰色砂質土および灰黄色

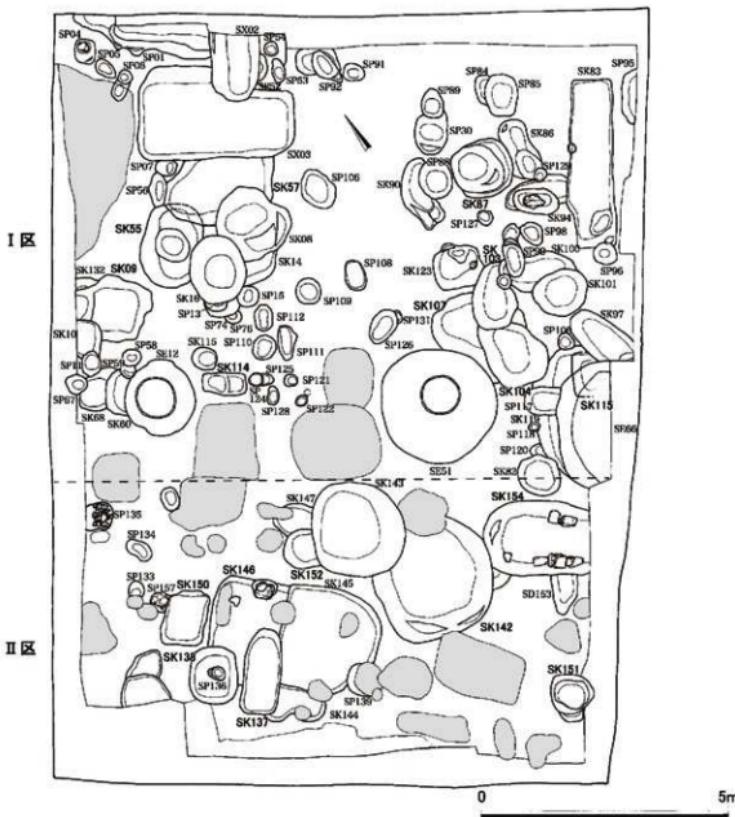


第3図 調査区の配置(1/200)



第4図 第1面遺構全体図(1/100)

～淡黄色細砂上で遺構・遺物を検出したため、この面で重機による掘削を止め、人力による調査に切り替えた。調査は、後述するI区第1面、I・II区第2面の2面の遺構面について実施した。遺構検出や掘削・精査を行い、適宜、デジタルカメラおよび35mmカメラ・6×7判カメラを使用して写真を撮影し、また1/10・1/20の実測図を作成して記録した。調査着手後間もなく、5月1日に元号が「平成」から「令和」に改まり、5月20日にはI区第1面と第2面の一部について全景写真を撮影した。その後、遺物包含層を人力にて掘り下げ、I区第2面の残り部分を調査した。6月5日にI区第2面の全景写真を撮影し、記録等を作成、排土搬出ののち、II区の調査を開始した。I区と同様に調査を進め、6月18日にII区第2面の全景写真撮影を実施した。記録類の作成や残務処理等を行った後、6月25日には機材等を撤収し、第228次調査の工程をすべて完了した。なお、調査ではコンテナケース40箱分の遺物が出土している。



第5図 第2面遺構全体図(1/100)

2) 調査の概要と基本層序(第3~5図、写真1~7)

調査は、2面について実施したが、上述のように表土鋤取りは、標高約4.9mの現地表面から1.2~1.3m程掘り下げた、標高3.6~3.7m付近で重機による掘削を止めた。この高さで調査区の北~北東側において褐色~褐灰色砂質土が確認でき、それ以外の部分では、灰黄色~淡黄色細砂の砂丘砂がみられた。つまり、第1面としたのは北~北東側で確認した褐色~褐灰色砂質土の上面であり、I区の一部にのみ認められるということである。この第1面とした褐色~褐灰色の遺物包含層を0.2~0.5m掘り下げた標高3.2~3.4mで灰黄色~淡黄色細砂となる。この砂丘砂上で遺構を検出し、I区第2面として調査した。I区第1面以外の部分は、この砂丘砂が連続して検出されるため、I区西側およびII区全体を第2面として取り扱った。第1面よりも上部の堆積状況は明確に記録できていないが、表土鋤取り時の所見では、掘削を止めた標高約3.6~3.7m部分の直上には黒灰~黒褐色砂質

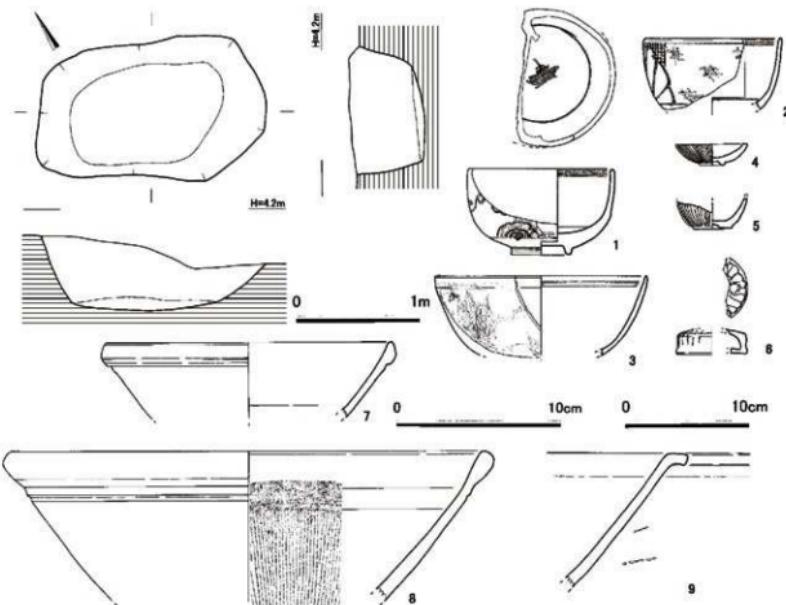
土が堆積し、近世～近代とみられる陶磁器等が多くみられ、近代頃の堆積と考えられる。これより上部には近代以降現代までの整理層や搅乱がある。なお、東側に隣接する第137次調査で確認された土層の状況が参考となる（福岡市2003「博多95」『市報第766集』p5）。第137次調査では、標高3.2～3.5mの第1面で15・16世紀から18世紀の遺構が幅広く分布している状況が確認されている。この遺物包含層を0.2m程削ると、標高3.0～3.3mで砂丘砂となり、ここでは15・16世紀の遺構が検出されている。本調査での状況とあわせて考えると、現地形・旧地形とともに西から東側に向かって緩やかに傾斜している状況が分かる。ここで、遺構面ごとの概要を述べておく。

第1面（第4図、写真1・2）

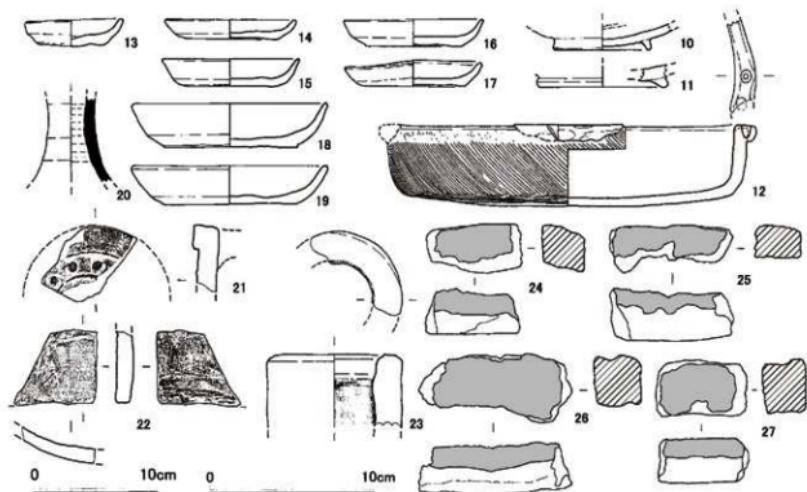
調査区の北～北東側1/4程度の部分で認められた褐色～褐灰色砂質土上面を第1面とした。第1面の標高は3.6～3.7m程度である。近現代の搅乱も著しい。東端で石組土坑1基（SK62）、廃棄土坑とみられる土坑1基（SK63）をはじめ井戸とみられる遺構（SE66）や土坑、小穴が検出された。多くが、近世期おもに18世紀以降の遺物が出土しており、近現代の遺物も多く出土している。

第2面（第5図、写真3～7）

上面を第1面とした褐色～褐灰色砂質土の遺物包含層を掘り下げた北～北東側も含めて、調査区全体で遺構を検出した。近現代の搅乱が著しい。調査区の北西側では、レンガ積みの炉とみられるSX2やこれに付随するとみられるSK3をはじめとして、SK57など木炭や焼土・灰などが大量に出土する鋳造関連の遺構とみられるものがある。瓦の廃棄土坑（SK8）や瓦組井戸2基（SE12・SE51）等近世から近現代の遺構も多いが、中世に遡る石組土坑（SK154）や廃棄土坑、小穴も検出し



第6図 SK17 実測図(1/40)および出土遺物(1/3, 7~9は1/4)



第7図 SK17 出土遺物(1/3, 21~27は1/4)

た。出土遺物から13~14世紀のものと考えられる土坑もあるが、主体となるのは15~16世紀の遺構である。

2. 遺構と遺物

報告にあたっては、I区・II区の区別はあまり意味がなく、むしろ遺構面の名称で混乱を招く可能性があるため、区や遺構面ごとに報告するよりも、時期ごとに区分して報告する方が分かりやすいと考えたため、時期ごとに遺構・遺物の報告を行う。検出した遺構には、01から始まる遺構番号を付しており、欠番はあるが重複はない。以下の報告にあたっても、原則として調査時の遺構番号を用い、この番号と遺構の種別を示す括弧とを組み合わせて表記する。

1) 近世～近代の遺構と遺物

(1) 土坑(SK)

SK17(第6図) I区第1面で検出し、調査区の北西側中央付近に位置する。平面形はやや不整な開丸長方形を呈し、長軸1.83m、短軸1.2~1.3m、高さ0.6mを測る。埋土は黒灰～暗灰色砂質土で、木炭や炭化物を大量に含んでいた。

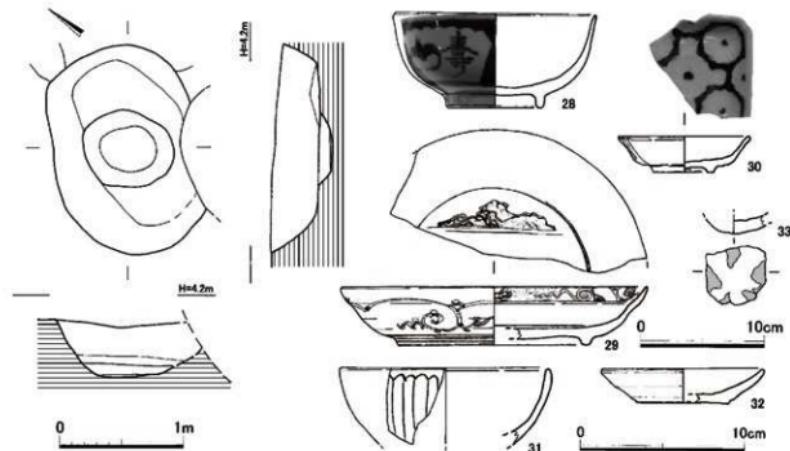
出土遺物(第6・7図) 1・2は、肥前磁器染付碗である。1は丸形の中碗で、外面は草花文、見込みには昆虫文、2は外面に菊花文が施される。3は明代青花碗で、小野染付碗E群に分類できよう。口縁部下には外面1条、内面2条の巻線が巡り、外面には唐草文が描かれる。4は白磁の紅皿で、貝殻状に型押成形され、高台以外に施釉される。口縁部の幅がやや広い。18世紀中頃か。5はミニチュアの壺か。白磁で内外面全体に施釉され、高台疊付は釉剥ぎされる。6は白磁の水滴で、菊花形に型押成形される。底部は無釉で、布目が残る。7は白磁枕IV類で、内面から体部外面上部まで施釉される。8は陶器擂鉢で、口縁部外側を肥厚させる。擂目は細かく密で、上端はなで揃えられる。

全体に薄く鉄軸が掛かる。18世紀中頃以降。9は陶器鉢もしくは片口か。外開きの器形で、口縁部は「く」の字状に外反し、外面体部には格子目状の叩き跡がわずかにみられる。全体に鉄軸が施される。10は高台付瓦器碗で、内底は丁寧なミガキが施される。11は土師質椀で、厚く低い高台が付く。内面は丁寧なヘラミガキが施される。12は土師器焙烙で、口縁端部に耳が付き、2つの孔があるが、貫通していない。外面体部は刷毛目調整される。煤の付着は見られず、未使用品か。13は土師器小皿、14~17は皿、18・19は壺である。すべて底部回転糸切りで、15・17・18・19には板状圧痕が残る。13の内面底部は指押さえにより、中央付近が凹む。20は須恵器高杯の脚柱部片か。内面に絞り痕が残る。8世紀頃。21は軒丸瓦の瓦当で、巴文の一部とやや大きめの珠文が配される。22は中国系平瓦である。凸面は丁寧にナデ調整さら、四面には布目が残る。23は小型の鍋に類する製品の土製鋳型か。残存部内面下端はやや内湾しており、底に近い部分に見える。内面は黒変する。24~27は溶解炉の炉壁か。内面は黒変し、鉄とみられる金属がべったりと付着する。

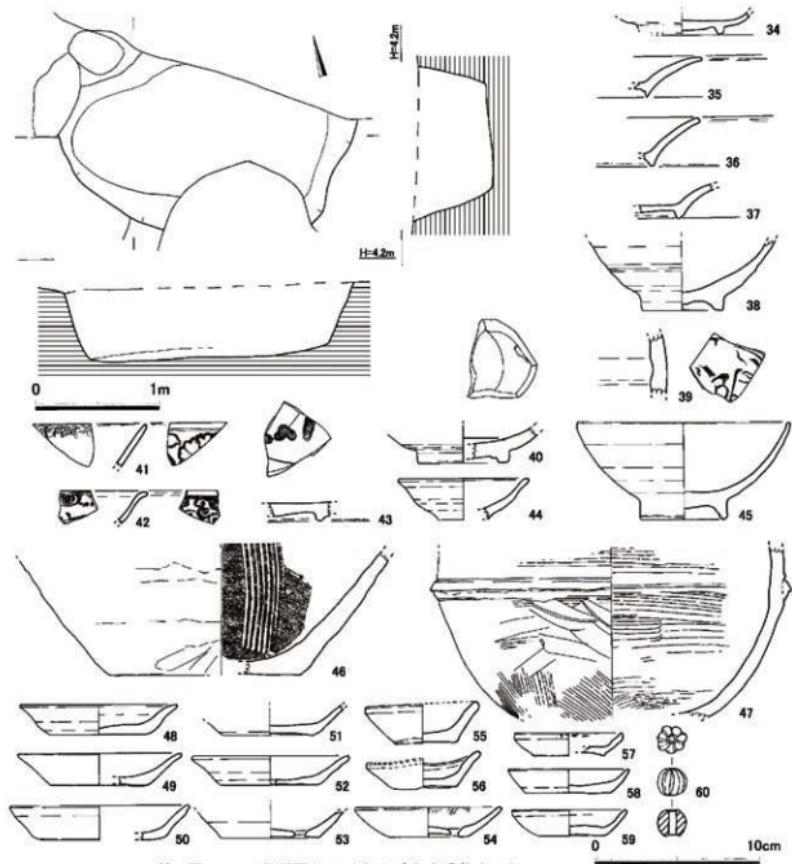
図示したものの他にも肥前系の陶磁器類が多く出土した。一部、8世紀や12~16世紀に遡る遺物も出土しているが、主体となる陶磁器の年代から18世紀後半~19世紀頃の遺構と考えられる。出土遺物に、炉壁や鋳型、青銅や鉄が溶解して冷え固まった金属片、木炭や灰等が多く出土しているため、鋳造関係施設が近くに存在したことを示しているのであろう。

SK55(第8図) I区第2面で検出し、調査区の西側に位置する。SK16・SP56・SK57と重複し、SK16より古く、SK56・57よりも新しい。平面形は長楕円形で、中央部に径0.6~0.7mの円形の掘り込みが7ある。長軸1.7m、短軸は1.2m程度、深さは0.4m、円形の掘り込み部分は0.5mを測る。埋土は暗灰褐色・黒灰色砂質土を主体として、暗黄褐色砂質土が混じる。炭化物や焼土が多く出土した。

出土遺物(第8図) 28は肥前磁器の染付蓋物の身で、口縁部内面は釉剥ぎされる。外面は四つの窓絵に寿字と蝙蝠、橘と梅の文様が2対ずつ描かれる。29は肥前磁器の染付八寸皿で、内面見込みに山水、口縁に扇子が描かれ、墨弾きにより渦巻文と蛇行文が描かれる。30は型打成形による角皿で、内面は菊花葉文である。高台疊付は釉剥ぎされる。31は龍泉窯系青磁碗で、上田分類B-IV類。簡略



第8図 SK55実測図(1/40)および出土遺物(1/3, 29は1/4)



第9図 SK57 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

化された細い連弁文が線彫りされる。32は土師器坏で、焼成が良く、堅く締まっている。底部は回転糸切りである。33は壇場で、全体に赤や緑・黒・灰色のガラス質が付着している。

15～16世紀にかけての遺物もみられるが、主体となるのは肥前陶磁器類である。遺構の年代は18世紀頃と考えられる。

SK57(第9図) I区第2面で検出した。調査区の西側に位置し、SX 3・SK 8・SK55と重複し、これらよりも古い。これらの遺構によって壊され、平面形は明確ではないが、不整な梢円形に復元できようか。長軸は2.4m、短軸は1.5m、深さは0.55～0.6mを測る。埋土は、上部は近現代の攪乱を受け、黒灰色～暗灰色砂質土がみられ、黄灰～黄白色細砂がブロック状に混じり、炭が多く出土した。遺構本来の埋土は暗灰褐色～暗褐色砂質土で炭化物や焼土粒も多く混じる。

出土遺物(第9・10図) 34

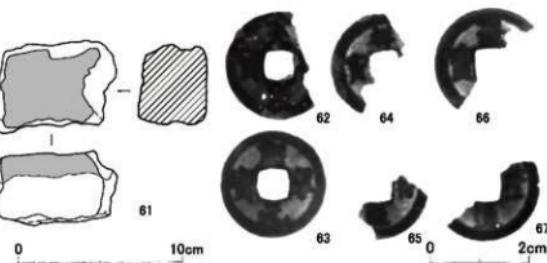
～37は白磁高台付皿。34はやや薄い造りで、内湾する体部をもつ。高台内露胎である。35～37は端反りのタイプで、高台疊付が釉剥ぎされる。38は肥前系の白磁碗か。釉は全体にやや薄く掛けられ、高台疊付および内面見込みに胎土目痕がある。39は龍泉窯系青磁壺か。その肩部周辺とみられる。

片切彫りにより、細かな草花文とみられる文様が施される。40は龍泉窯系青磁浅型椀か。内面見込みに一重圓線、内面に片切彫りによる文様が施される。高台疊付から高台内は無釉で、高台内に胎土目痕がある。41は明代青花碗で、小野分類E群か。外面には花文、内面口縁下部には七宝繫文とみられる文様帯がある。42は小野分類B2群の端反皿で、外外面に溝文を主体に施文される。43は肥前磁器染付皿で、高台疊付は釉剥ぎされる。44は陶器小皿で、内湾する体部から外反する口縁をもつ。二次的に被熱しており、釉はくすんだ白～灰色に変色し、器面も荒れている。45は肥前系陶器碗で、体部から口縁部は薄い造りである。全体に鉄釉が掛けられ、高台疊付には砂目痕がある。46は備前焼の櫛鉢か。櫛目は幅の広い8本単位の櫛目で、内面底部には及んでいない。外面にわずかに煤が付着している。47は瓦質土器茶釜の体部である。外面下部には煤が厚く付着する。外面下部は細い刷毛目、内面や体部上半はやや粗い刷毛目で調整される。48～54は土師器壺、55～59は土師器皿で、すべて底部回転糸切りである。53は底部に焼成後の穿孔が1箇所あり、穿孔を試みた痕が何箇所ともみられる。中心ではなく、端に寄った位置に穿孔されており、複数の孔があったのだろう。天秤皿などに使用されたものと考えられる。55・56は器高が高く、分厚い造りで、56は著しく歪む。57の口縁部には煤の痕跡があり、灯明皿として使用されたものか。60はガラス製の装飾具か。中心の孔に紐などを通して使用されたようで、孔の周囲は摩滅が著しい。61は溶解炉の炉壁と考えられる。内面は被熱により黒変し、溶けた金属が付着する。62～67は鉄で、62は大唐通寶(南唐・初鑄960年)、63が熙寧元寶(北宋・初鑄1068年)、64は祥符通寶か祥符元寶(北宋・初鑄1009年)、65は祥符通寶、66・67は元豐通寶(北宋・初鑄1078年)である。いずれも錫に覆われ、また表面の摩滅が著しい。

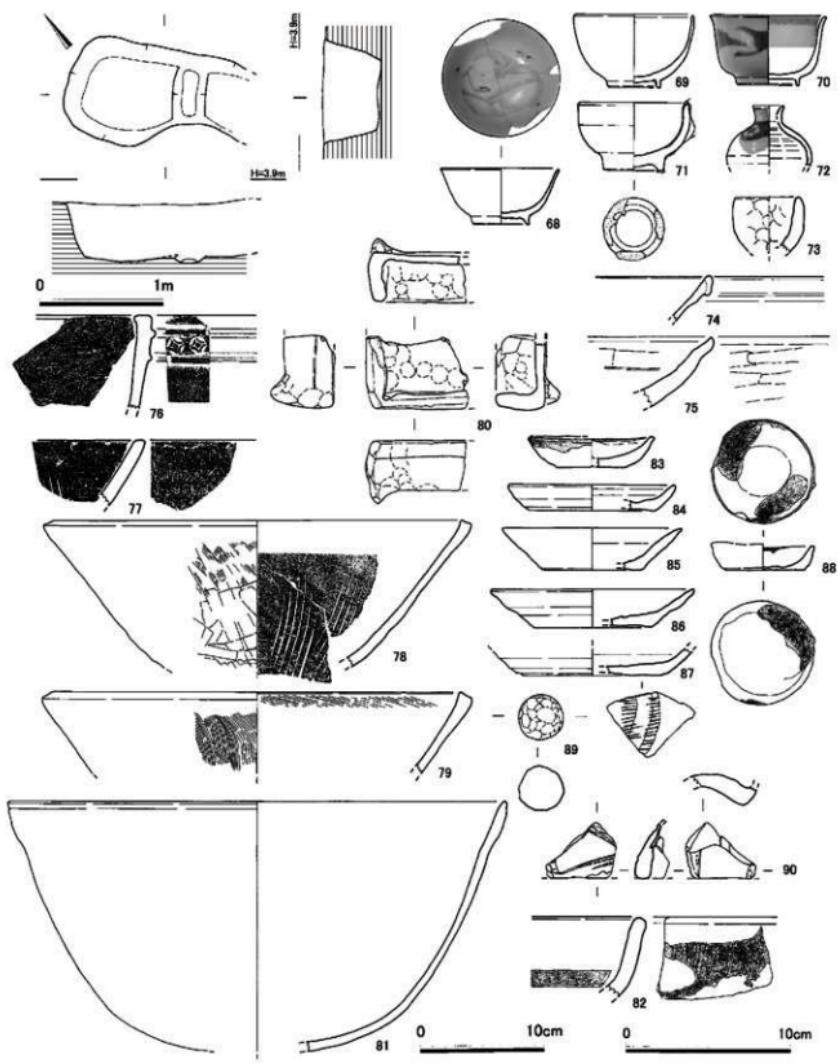
13世紀まで遡る遺物や16世紀中頃から末頃の白磁・青花もあるが、18世紀頃の肥前陶磁器が主体である。遺構もこの時期の所産と考えられる。

SK77(第11図) I区第1面で検出し、調査区の北側に位置する。東側をSK65に接され明確ではないが、平面形は歪な長方形とみられ、中央にあたるとみられる部分の南側はくびており、底面もこの部分が溝状に一段下がっている。長軸は現状で1.65m、短軸は0.9m、中央のくびれ部で0.7m、深さは0.45m、中央の一段下がった部分で0.5mを測る。埋土は、暗灰色砂質土で、炭が大量に混じっていた。SK43～46とも重複し、これよりも新しい。

出土遺物(第11図) 68・70は肥前磁器端反小碗である。68は白磁素地で、内面に七福神の大黒が赤・黄・緑・金で上絵付される。70は外面上に雁、内面口縁下部に雷文帯が染付される。69は全体に鉄釉が施され、高台疊付は釉剥ぎされる。71は陶器小碗で、二次的に被熱したのか、全体に煤けて



第10図 SK57出土遺物(61は1/4、62～67は1/1)



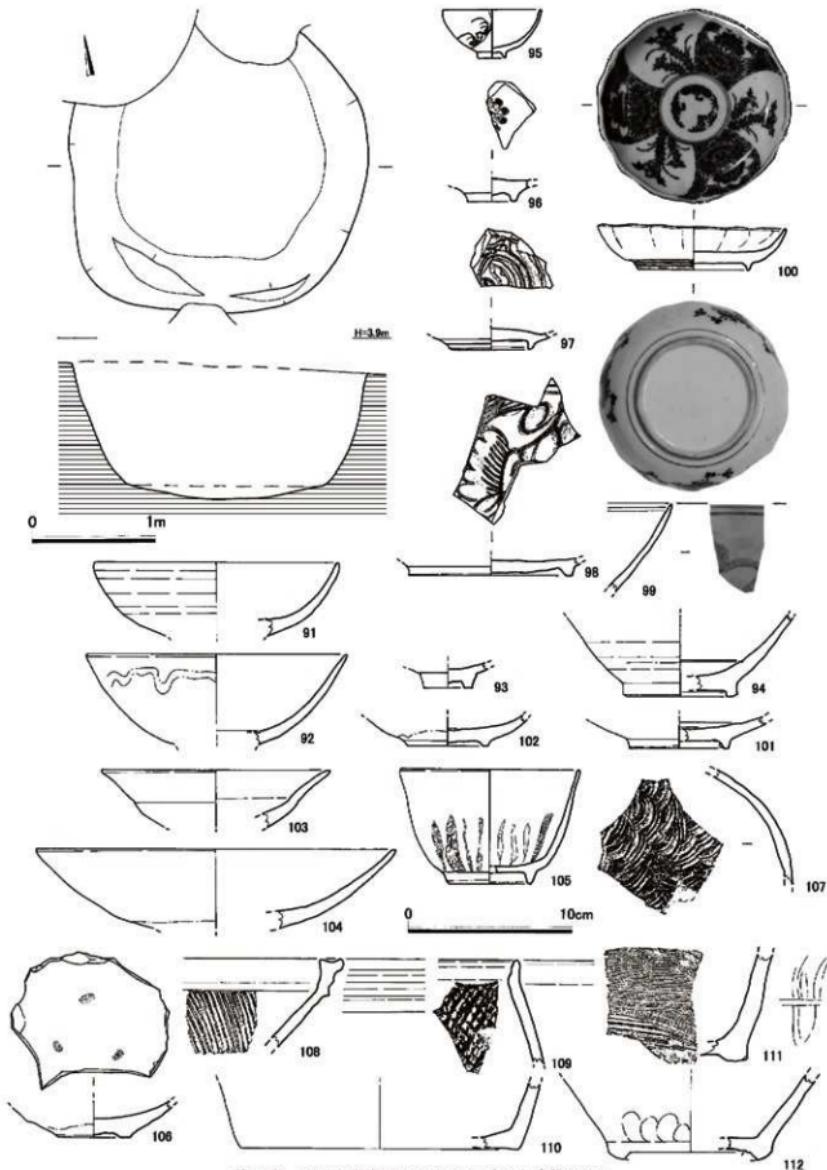
第11図 SK77実測図(1/40)および出土遺物(1/3、76~81は1/4)

いる。全体に灰釉が施され、外面に耳が付いていたようである。高台臺付には胎土目痕が4つ残る。72は肥前磁器の赤絵仏瓶で、肩部に赤・金で草花文が施される。73は壇堀で、全体に赤・緑色・

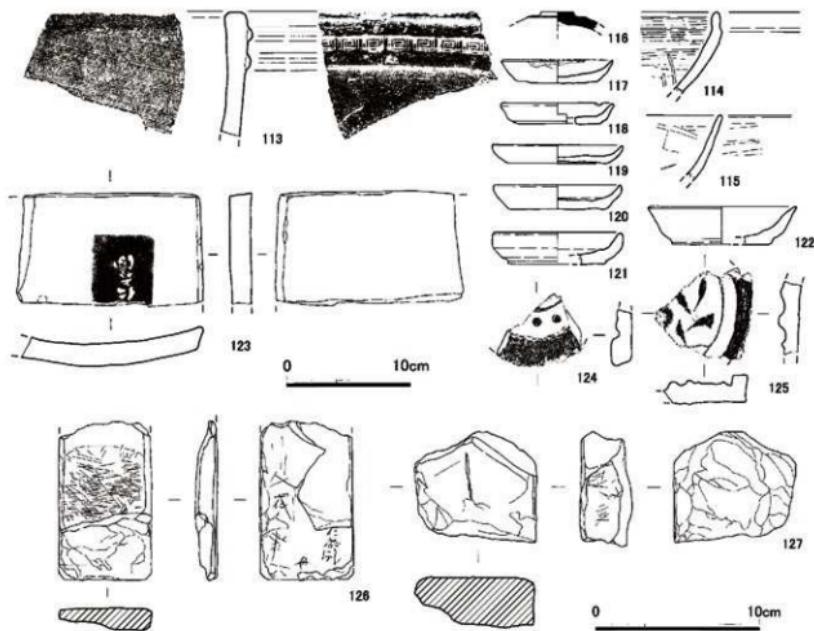
灰色のガラス質が付着する。74は白磁碗IV類の口縁部である。75は肥前陶器皿で、緩やかに湾曲した胴部が延びて口縁部は外反し、内面に段をもつ。藁灰釉が施される。16世紀後半から17世紀初頭か。76は瓦質土器火鉢の口縁部付近の破片で、外面口縁部下に2条の突帯が巡り、その間に七宝文が印刻され、内面はごく細い刷毛目で調整される。77・78は瓦質土器擂鉢で、幅の広い擂目がある。77は外面の摩滅が著しいが、粗い縱方向の刷毛目調整が施される。78は口縁端部を内側にわずかにつまみ出す。内面は横方向の細かい刷毛目調整が施された後、擂目が付けられ、内面下部には使用による摩滅がみられる。79は瓦質土器鉢で、口縁端部をわずかに内側につまみ上げる。外面は縱方向、内面口縁下周辺は斜め方向の刷毛目調整がなされる。内面は下部ほど摩滅する。80は瓦質土器の小型鉢で、箱庭道具か。外面底部四隅に短い足が貼付される。外面体部には一条の沈線が巡る。内面には指頭圧痕が顕著に残り、外面底部には板状圧痕が残る。81は土師器鍋で、全体に被熱により変色し、橙～灰褐色を帯び、外面には煤が付着する。外面底部付近と内面には刷毛目が残る。82は土師器焰烙で、外面に縱方向のミガキ調整が残り、煤が付着する。内面には黒斑がある。83・84は土師器皿で、83は口縁端部の一部が打ち欠かれており、灯明皿として使用されたものであろう。ともに底部は回転糸切で、84には板状圧痕が残り、内外面に黒斑がみられる。85～87は土師器坏で、85・86は直線的に開く体部をもつ。すべて底部は回転糸切りで、87には板状圧痕が残る。板状圧痕としたが、刷毛状工具による調整のようにもみえる。88は陶器灯明皿である。口縁部より下部の内面に透明釉が施釉され、口縁部には全体に煤が付着する。89は瓦質土器の球で、毬杖玉あるいは投弾と考えられる。表面は滑らかに仕上げているが、成形時のすり付け部分はひび割れ、やや難な印象を受ける。90は土製人形の一部であるが、小片のためどのような製品のどの部位かは不明。型により成形され、内面には成形時の指痕が残る。このほかに、中世後期に遡る丸瓦や、さらに古い中国系平瓦も出土している。出土遺物から17世紀後半から18世紀の遺構と考えられる。

SK142(第12図) II区第2面で検出した。調査区の南東側に位置する。平面形はやや不整な円形で、径2.4～2.5m、深さ1.1mを測る。埋土は暗黄褐色～暗黄灰色砂質土である。K38、SK143、SK154と重複し、SK154より新しく、K38・SK143より古い。

出土遺物(第12・13図) 91は龍泉窯系青磁浅形碗(高台付皿)で、I-1類に該当するか。内外面無文で、胎土は緻密で灰色を呈する。92は龍泉窯系青磁碗I-1類に該当するか。内外面無文で、内面見込みに沈線が認められる。釉は全体に薄く掛かり、外面上部には釉垂れがみられる。93は龍泉窯系青磁小碗で、小碗IV類に該当するか。高台内が環状に釉剥ぎされ、疊付の釉も削られている。94は中国産白磁碗で、内面見込みに段が付き、見込み側が体部よりも一段凹む。見込みには釉が十分に掛からず露胎となっている部分があり、体部外面下半以下は露胎である。95は肥前磁器染付小碗で、外面には草花文が描かれる。高台疊付は釉剥ぎされる。96は東南アジア産の青花小碗か。焼成不良でやや軟質。内面見込みにハスとみられる花文が染付される。高台内は露胎で、削り出し痕が明瞭である。100は肥前磁器輪花皿で、銅板転写により内面見込みには松竹梅文、その外側に草花文、外面にも花文が施される。高台疊付は釉剥ぎされる。97は明代青花皿か。高台疊付とその内面周辺まで釉剥ぎされる。98は肥前磁器初期伊万里の染付皿で、内面見込みには大きく草花文が描かれているようである。高台見込み中央部は粗く釉剥ぎされ、高台見込みの外周部には大粒の砂が付着する。99は肥前系磁器初期伊万里の大振りの染付碗か。内面口縁部下に1条の園線、外面には龍が染付される。101は肥前系陶器皿で、高台疊付には砂が付着する。内面見込みは環状に釉剥ぎされる。102は肥前系陶器皿で、内外面に藁灰釉が掛けられるが、体部下半以下は露胎である。胎土はやや粗く、暗赤灰色を呈し、長石・石英粒を多く含む。103は肥前系陶器の小皿で、高台から斜め上方に向けて体部が延び、体部中ほどでくの字形に屈曲する。104は肥前系陶器の皿で、体部は緩やか

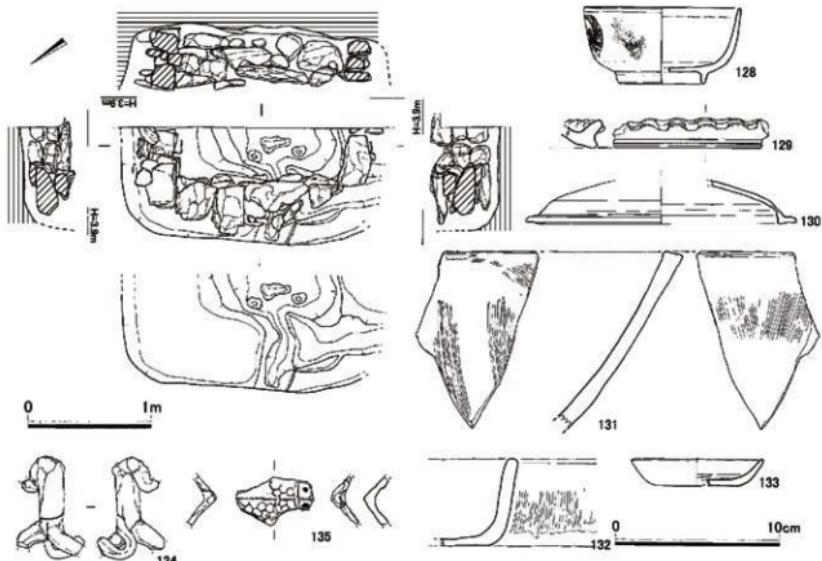


第12図 SK142 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)



第13図 SK142出土遺物(1/3、123~126は1/4)

に内湾しながら口縁部に至る。体部下半まで施釉される。105は肥前系磁器筒丸状の碗で、全体に釉軸が薄く施釉され、さらに流し掛けも行われている。高台疊付周辺は釉剥ぎされる。17世紀後半。106は肥前系陶器皿で、削り出しの高台は低い。高台は胎土目を剥がした際に一部破損している。内面見込みにも胎土目痕が3箇所残る。内外面に鉄軸が施釉され、体部下半以下は露胎である。107は灰釉陶器壺の胸部か。胎土はやや淡い紫灰色を呈し、白・黒色砂粒を含む。釉調は暗緑灰へくすんだ灰白色で薄く施釉される。内面は施釉されないが、円盤状の當て具痕がある。108は陶器搗鉢で、薄い造りである。搗目は細く密である。口縁部外面は三段に削り出され、口縁部内面は断面三角形状に内側へ引き出されている。全体に鉄軸が施される。109は陶器短頸壺の口縁部、110は同一個体の底部とみられる。全体に鉄軸が施され、109の内面には格子目状の當て具痕跡が残る。111は瓦質土器火鉢で、半楕円状の脚が付く。内面には刷毛目、外面には太いヘラミガキが施される。112は瓦質土器火壺の底部か。底部には不整な三角錐状の脚が貼付される。内面は板状工具によるナデ、外面には指頭圧痕が残る。113は瓦質土器火鉢で、外面口縁部下には2条の突帯があり、その間に雷文が連続して印刻されている。内面は斜め・横方向に刷毛目調整される。114は瓦器鉢で、外面口縁部下に段が付く。内面は横方向のヘラミガキにより調整され、現状2本の搗目状の刻み目がある。小型の搗鉢か。115は瓦器椀で、内外面とも丁寧なヘラミガキにより調整される。116は須恵器環蓋で、極端に扁平な摘みが付く。117~122は土師器皿で、すべて底部回転糸切りである。117の口縁部には煤が付着し、118の口縁部には一部打ち欠きがみられ、これらは灯明皿として用いられ



第14図 SK62 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

たものであろう。123は平瓦で、凹面に「仁兵衛」の印刻がある。124は軒丸瓦の瓦当で、珠文と巴文の一部がみえる。125は中国系軒丸瓦で、瓦當に草花文を配している。126は石製硯で、赤間硯か。重量は237.2g。陸の部分には無数の傷が入っている。裏面下方に線刻があり、左側から「花□車」、「□」(花押か)、「仁□□」とみえる。127は砥石で、少なくとも2面が使用される。重量は208.4g。図左の砥面には中央付近にやや深い線刻がある。このほかに、炉壁や金属・ガラス滓・炭なども多く出土した。19世紀の造構と考えられる。

SK62(第14図) I区第1面で検出し、調査区の中央東端に位置する。長軸3.2m、短軸は現状0.7m、深さは石組内の深いところで0.7m、浅いところでは0.5mを測り、掘方は長軸3.7m、短軸1.6mを測り、二段掘りとなる。深さは浅いところで0.15m、深いところでは0.8mを測る。石組の概ね三段分が残存、検出されたが、東側は調査区外へ延びる。SK63と重複し、これよりも新しい。

出土遺物(第14図) 128は肥前磁器染付碗で、外面には鶴と松が描かれる。高台墨付と口縁部内面は釉剥ぎされる。129は陶器鉢底部である。口縁部は押圧により波状を呈する。130は陶器蓋で全体に薄く透明釉がかかる。131は瓦質土器の擂鉢、全体に磨滅が著しい。擂目はやや太い櫛目で6本単位である。132は土師質土器鉗で、外面には煤が付着する。133は土師器で底部は回転糸切りである。134は土製人形の猿で、頬部は欠損する。細い粘土紐を接合して作られている。135は型押成形された土製人形の亀である。18世紀頃の造構と考えられる。

2) 中世の遺構と遺物

(1) 土坑 (SK)

SK78 (第15図) 調査区の中央東側に位置し、I区第1面で検出した。SE66と重複し、これよりも古い。土坑としたが、溝である可能性もある。現状で長さ1.1m、幅0.4~0.45m、深さは0.1~0.15mを測る。主軸はN-60°-Wにとる。埋土は暗灰褐色砂質土である。

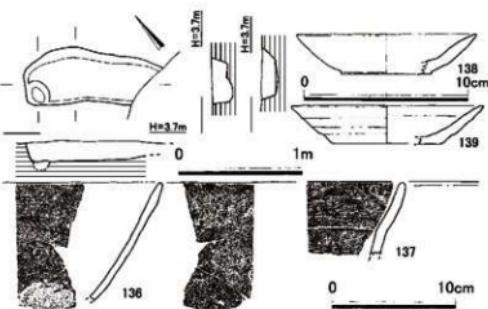
出土遺物 (第15図) 136・137は土師質土器鍋で、136は内湾する体部から直線的に口縁部に至り、137は口縁部下でわずかに外反する。内面は刷毛目、外面は刷毛目後ナデ調整される。138・139は土師器坏で、体部は底部から外に開きながら直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。出土遺物から15~16世紀代の遺構と考えられる。

SK114 (第16図) 調査区の中央西寄りに位置し、I区第2面で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸0.9m、短軸0.4~0.5mである。東側が浅く、西側が深い二段掘りとなっており、東側が深さ約0.1m、西側が深さ0.2mを測る。主軸はN-55°-Wにとる。埋土は暗灰褐色砂質土である。

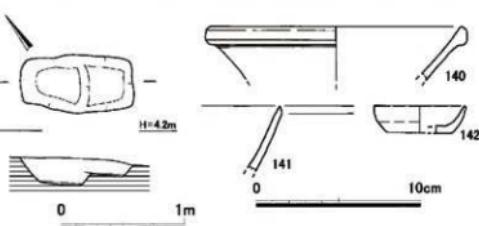
出土遺物 (第16図) 140は白磁碗IV類で、やや厚い玉縁口縁をもつ。141は白磁碗II-4類の口縁部でやや内湾した直口縁をもつ。142は土師器皿で、底部は回転糸切りである。このほかに青磁・白磁片、中国産陶器片や瓦片等が出土している。出土遺物から14世紀後半~15世紀の遺構と考えられる。

SK137 (第17図) 調査区の南端近くに位置し、II区第2面で検出した。平面形は長楕円形を呈し、長軸1.8m、短軸0.75m、深さは0.1m程度を測る。主軸はN-34°-Eにとる。

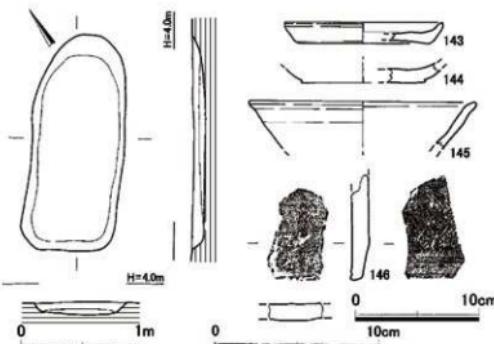
SK145・SK146と重複し、いずれよりも新しい。埋土は暗黒褐色砂質土で、炭化物を多く含んでいた。検出



第15図 SK78 実測図(1/40)および出土遺物(1/3、136-137は1/4)



第16図 SK114 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)



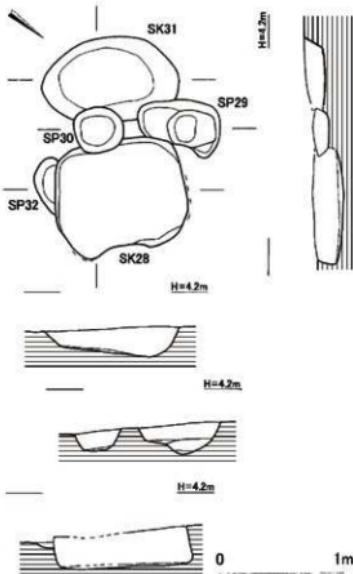
第17図 SK137 実測図(1/40)および出土遺物(1/3、146は1/4)

した際は土壌墓かと考え精査したが、そのような痕跡はみられなかった。

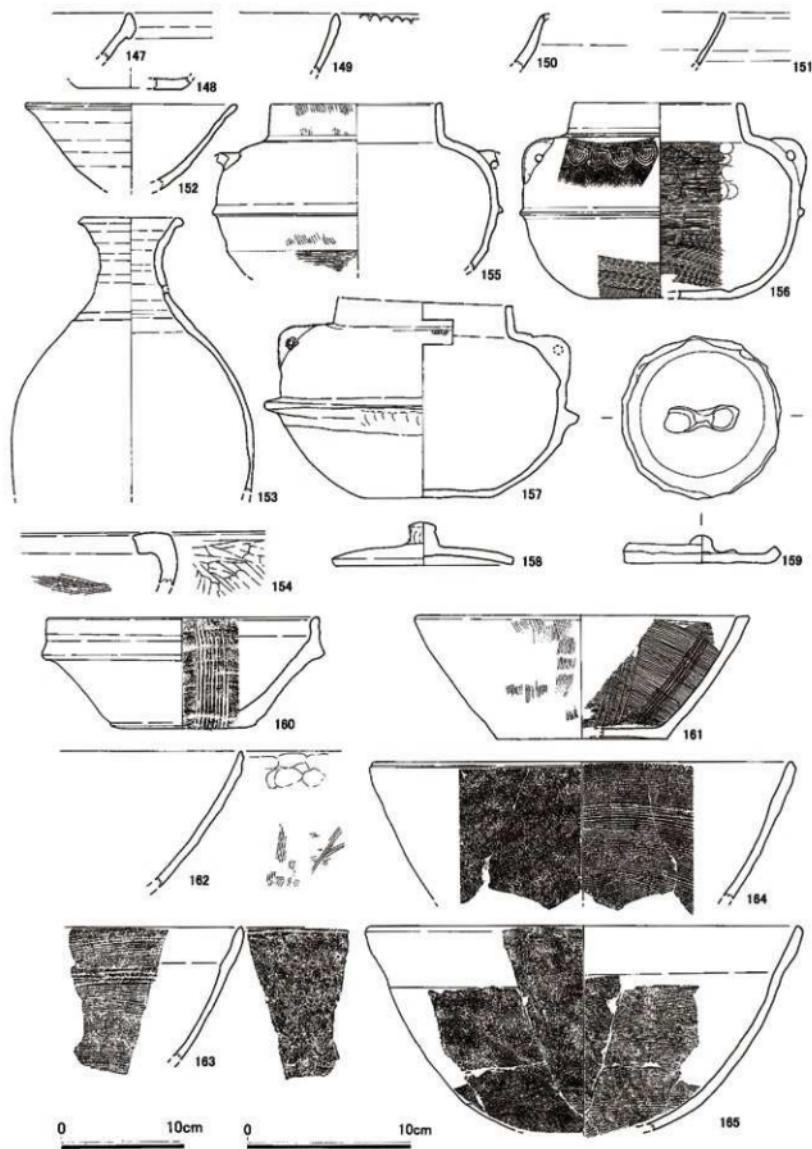
出土遺物 (第17図) 143は土師器皿、144・145は土師器坏である。144・145は底部回転糸切りである。146は中国系平瓦で、凹面には布目痕が残る。凸面は丁寧にナデ調整される。このほかに鉄釘や青磁片、瓦器碗、鐵滓等が出土した。出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

SK28・SK31・SP29・SP30・SP32 (第18図) 調査区の中央や北西寄りに位置し、I区第2面で検出した。平面略方形 (SK28) と梢円形 (SK31) の間に長梢円形 (SP29)・円形 (SP30) の小穴があり、SK28の東側に重複し、切られる形でSP32がある。検出時の様子や遺物の出土状況から、このまとまりで1つの遺構と考えたが、用途は不明。重複関係にはやや曖昧な部分がある。埋土はSK28が暗灰色砂質土、SK31が暗灰褐色砂質土、SP29・30・32は暗褐色砂質土で焼土粒・炭化物粒が混じる。主軸はN-37°Wにによる。

SK28出土遺物 (第19・20図) 147は白磁碗IV類の口縁部、148は白磁皿VII類に該当するものか。底部は平底で、体部内面の見込みと体部の間にわずかに沈線状の段がある。底部の軸は施釉後に粗く削っているが、ほとんどが残る。149は龍泉系青磁碗で、上田B類に該当するものか。外面口縁部下に細い線描きで連弧文が施される。剣頭と細線で連弁文を表現するタイプの細線が省略されたものであろう。150は陶器小碗か。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部下でわずかに外反する。透明釉が施される。151・152は朝鮮粉青沙器碗とみられるが、152は唐津焼の可能性がある。151は薄く灰釉が施され、胎土は緻密で明灰～灰橙色を呈し、極小さな白・黒色砂粒を含む。152は口縁部下でわずかに外反する。透明釉が施される。153は陶器瓶で、全体に鋼釉が施され、内面には円形の當て具痕が残る。154は瓦質土器火鉢で、内面は横方向の刷毛目調整、外面は丁寧なヘラミガキにより調整される。155～157は瓦質土器茶釜で、ほぼ同型のもので完形に近いものが3個体出土した。155・157の内面は丁寧にナデ調整され、器面調整の痕はほとんどみられないが、156の肩部内面には成形時の指押さえが明瞭に残り、刷毛目調整も全面的にナデ消されていない。157の耳には鉄製の釣手の一部が孔の中に残存する。158・159は茶釜の蓋であろう。水差しの蓋等である可能性もある。口に載せるタイプと口に嵌まるタイプで、摘みの形状も円頭円柱に水引きされたものと粘土紐を貼り付けたものとそれぞれ異なり、釜本体はほぼ同じ形状でも蓋には様々なタイプがあるのだろう。160は備前焼擂鉢で、体部から直立して立ち上がる口縁部で、外面口縁部下は断面略三角形状に肥厚される。擂目は8本単位の櫛描きである。161は瓦質土器擂鉢で、外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整が施され、擂目はやや幅広の5本単位の櫛描きによる。162～165は土師質土器鍋で、162はやや内湾しながら立ち上がりそのまま口縁部にいたるが、163～165は口縁部下で緩く屈曲して口縁部となる。外面には煤が付着している。166～169は土師器皿で底部はすべて回転糸切りである。169は水引き痕が明瞭に残る。170・171は高台



第18図 SK28-31, SP29-30-32実測図(1/40)



第19図 SK28 出土遺物①(1/3、155～165は1/4)

の付く土師器小型鉢か。171は造り出し高台で、やや上げ底である。内面には水引き痕が明瞭に残る。172・173は土師器壺で底部は回転糸切りである。174は壺で、外面は丁寧にナデ調整される。一部煤が付着している。図示したもののほかにも小片だが明青花合子や青磁片等も出土している。出土遺物から15世紀後半～16世紀にかけての造構と考えられる。

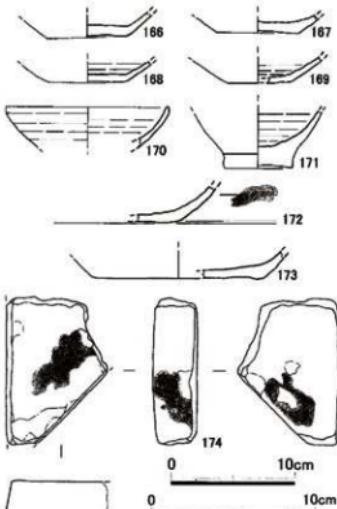
SK31出土遺物(第21図) 175は龍泉窯系青磁香炉か。内面は露胎、高台内は釉剥ぎされる。176は中国産陶器壺もしくは壺の底部で、内面底部付近に粘土紐の接合痕が残る。底部は露胎である。177は平瓦で、凹面は板状工具によるナデ調整される。出土遺物から15世紀後半～16世紀代の造構と考えられる。

SK43(第22図) I区第1面で検出し、調査区の北隅付近に位置する。平面形は略圓丸方形の土坑と細い長方形の溝が接続したような形状で、底面に円形・梢円形・不整形の小穴が掘り込まれている。長軸は全体の長さが2.6m程、短軸は略圓丸方形の土坑状の部分が1.7m、細い溝状の部分が0.6m、深さは0.1mを測り、底面に掘り込まれた小穴は底面の高さから0.15～0.2m程の深さがある。主軸はN-39°-Eにとる。埋土は暗灰～暗灰褐色砂質土である。SK77と重複し、これよりも古い。

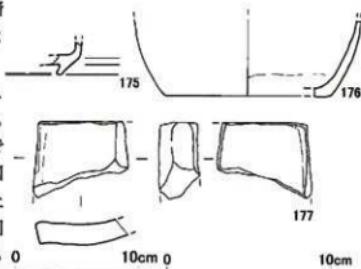
出土遺物(第22図) 178は白磁碗IV類の口縁部で、厚い玉線状の口縁部をもつ。179は龍泉窯系青磁皿か。内外面に片切彫りによる文様が施される。高台内まで施釉される。180は粉青沙器碗の口縁部。181は中国産褐釉陶器壺の肩部か。外面に施釉される。182は土師器皿、183・184は土師器壺である。すべて底部回転糸切りである。185は土錘で、中央の孔は両側から穿孔される。図示したもののほか、中国系瓦片等も出土している。出土遺物は12～14世紀のものも含まれているが、造構の時期としては15世紀後半～16世紀のものと考えられる。

SK146(第23図) 調査区の南東端付近に位置し、II区第2面で検出した。撲乱K30・39や、SK137・138・SP156が重複し、いずれよりも古い。平面形は明確ではないが、現状では圓丸長方形を呈し、長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.15～0.2m程を測る。主軸はN-38°-Eにとる。埋土は暗灰褐色～暗灰色砂質土である。

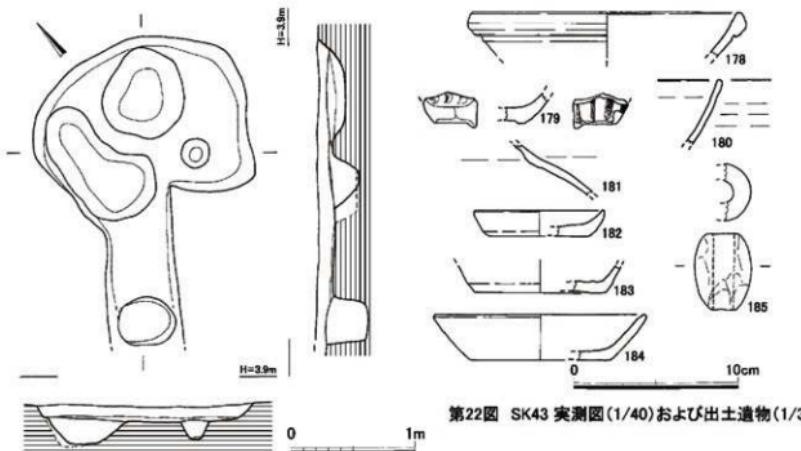
出土遺物(第23図) 186は龍泉窯系青磁碗で、内外面無文で、やや内湾する直口縁をもつ。187は白磁小皿で口縁部を欠損しているが、口縁部がやや外反するものである。189は陶器瓶底部で、上部は釉が掛かるものであるかも知れないが、出土部分は露胎で、ざっくりとした横方向のケズリが顕著である。188は瓦器皿である。内外面とも丁寧にナデ調整される。190は土師器皿、191は土師



第20図 SK28出土遺物②(1/3, 174は1/4)



第21図 SK31出土遺物(1/3, 177は1/4)



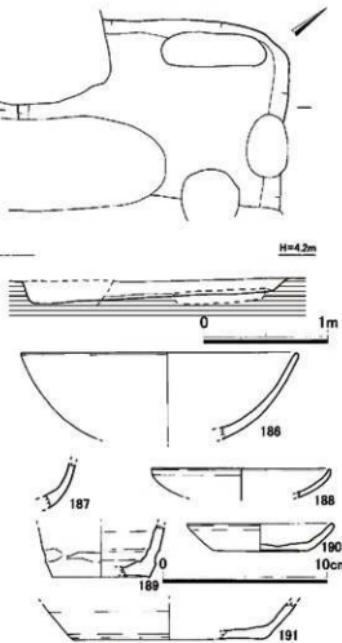
第22図 SK43 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

器坏で、いずれも底部回転糸切りで、内底は不定方向のナデ調整。出土遺物から14世紀後半～15世紀の遺構と考えられる。

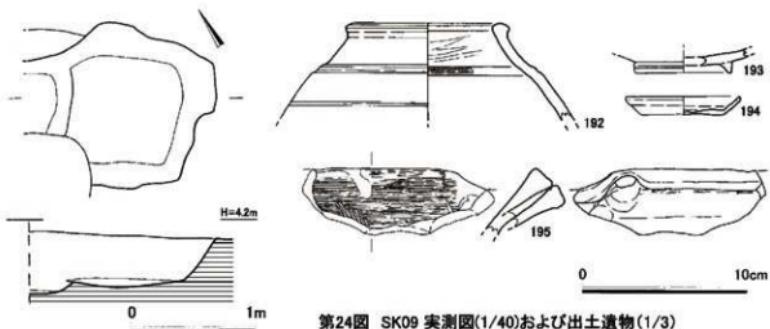
SK9(第24図) 1区第2面で検出し、調査区の中央西端に位置する。南側でSK10、西側でSK132と重複し、SK10より古く、SK132より新しい。現状では平面略方形に近いが、西側は調査区外に延びている。長軸1.6m、短軸1.35m、深さは0.4mで、西側は一段低くなっている。主軸はN-58°Wにとる。埋土は暗灰褐色砂質土で、炭化物をわずかに含む。

出土遺物(第24図) 192は中国産褐釉陶器壺で、耳壺V類に該当する。耳は欠損するが、肩部に横沈線が巡る。口縁端部には胎土目痕が残る。193は瓦質土器槽体で、槽目はやや細い櫛目で入れられている。内面には横方向の刷毛目調整が残る。194は瓦器高台付环で内面見込みにはヘラミガキが施される。195は土器師皿である。底部回転糸切りで、板状圧痕が残る。15世紀後半～16世紀の遺構と考えられる。

SK115(第25図) 調査区の東端中央部に位置し、II区第2面で検出した。SE66の掘削中に掘方が現れ、現状、平面形は隅丸方形を呈し、東西方向は0.5m程度が確認でき、南北方向は0.9mを測る。主軸はN-57-Wにとる。深さは0.6m程が残存する。SE66・SK97・SK119と重複し、SK119より新しく、SE66・SK97よりも新しい。



第23図 SK146 実測図(1/40)
および出土遺物(1/3)



第24図 SK09 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

埋土は黒色砂質土で、炭化物や焼土粒が多く混じっていた。

出土遺物(第25図) 196は東南アジアや朝鮮半島産の陶器皿か。やや黄灰色を帯びた釉が掛けられる。内面はヘラ描きによる文様、外面は櫛描文が施される。197は土師器皿で、口縁端部が一部欠損する。底部回転糸切りである。出土遺物は少なく、時期を推定するのは難しいが、15~16世紀代のものか。

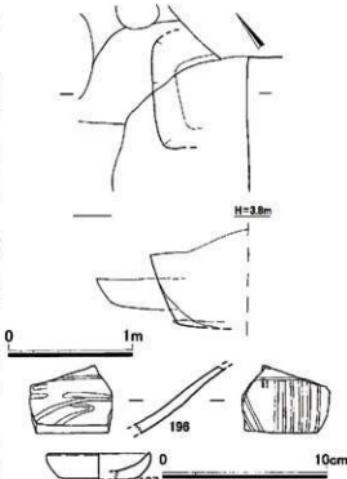
SK123(第26図) 調査区の北東側や中央寄りに位置し、I区第2面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。底面の北側に掘り込みがあり、この部分は検出面からの深さ0.4mを測る。主軸はN-110°-Eにとる。埋土は暗灰褐色砂質土で、検出時に完形の土師器環が正位置で出土した。

出土遺物(第26図) 198・199は土師器環である。198が検出時に出土したもので、199は掘削中に出土した。どちらも底部回転糸切りである。出土遺物は、この土師器環2点のみである。遺構の時期は14世紀後半であろう。

SK150(第27図) 調査区の南端近くに位置し、II区第2面で検出した。平面形はやや歪な隅丸長方形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.2~0.3mを測る。主軸はN-40°Eにとる。埋土は暗灰褐色砂質土で炭化物を少量含む。

出土遺物(第27図) 200は白磁碗II-4類で、やや内湾した直口縁をもつ。201は土師器皿で体部は中ほどで外側に屈曲する。底部は回転糸切りで板状圧痕は残る。202は元豐通寶(北宋・初鈔1078年)で行書体である。表面の磨滅は少なく、文字も明瞭に読める。出土遺物は少ないが、図示したもののはかに鉄釘、青磁片等がある。出土遺物から14世紀後半~15世紀の遺構と考えられる。

SK138(第28図) 調査区の南端近くに位置し、II区第2面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、



第25図 SK115 実測図(1/40)
および出土遺物(1/3)

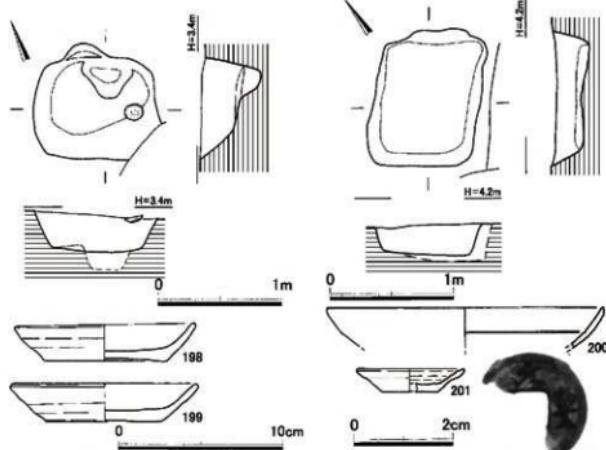
長軸1.2m、短軸1.0m、深さは0.7mを測る。主軸はN-35°Eにとる。SP136が中央部に位置している。埋土は暗黄褐色砂質土を主体に暗灰色砂質土が混じる。木質の付着した鉄釘が多く出土したが、板の痕跡等もなく、箱状のものを想定できるような出土状況ではなかった。

出土遺物(第28図)

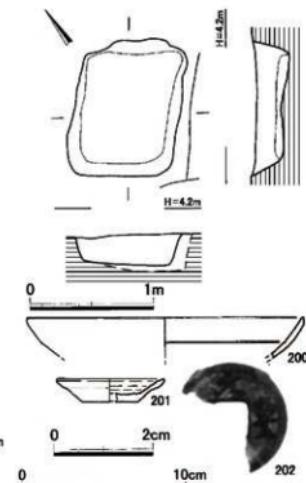
203は陶器灯明皿で内面は口縁部下より下部が施釉され、それ以外は露胎である。

204は陶器壺もしくは甌の底部で、底部は露胎である。205は瓦質土器片口である。内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目調整が施され、その後粗くナデられ、指壓さえ痕が顕著である。206・207は土師器壺で、206の底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。208は開元通寶(南唐・初鑄960年)である。出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

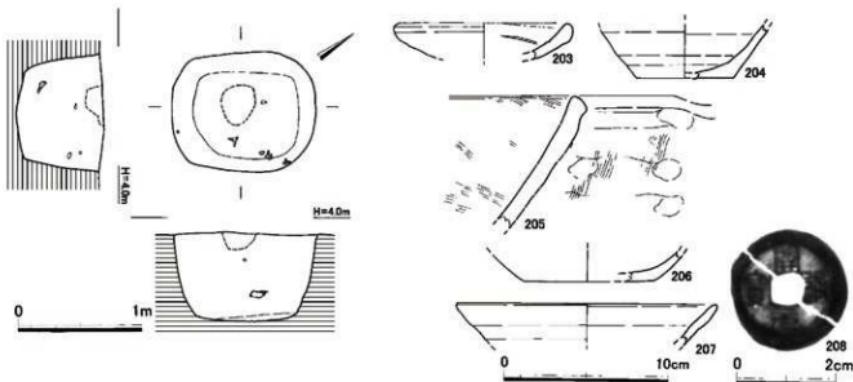
SK103・SK104(第29図) 調査区の東側や北寄りに位置し、I区第2面で検出した。両者とSK107は重複し、SK107が最も古く、SK104、SK103の順に新しい。SK103は平面長楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.9~0.95mを測る。深さは南側から中央付近が0.4m、北側が0.25mである。主軸はN-35°Eにとる。SK104は平面不整な隅丸方形で、長軸1.5m、短軸0.95~1.2m、深さは0.5mを測



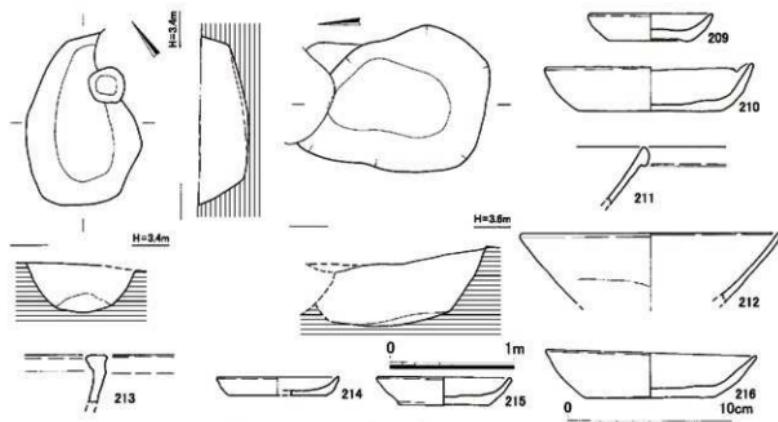
第26図 SK123 実測図(1/40)
および出土遺物(1/3)



第27図 SK150 実測図および(1/40)
出土遺物(1/3, 202は1/1)



第28図 SK138 実測図(1/40)および出土遺物(1/3, 208は1/1)



第29図 SK103・104 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

る。主軸はN-2°-Wにとる。埋土はどちらも暗黄褐色砂質土である。

出土遺物(第29図) 209・210はSK103から出土した。209は土師器皿、210は土師器坏である。ともに底部は回転糸切りで、210の口縁部には一部打ち欠きがあり、灯明皿として使用されたものと考えられる。211～216はSK104で出土した。211は白磁碗IV類の口縁部で、やや厚い玉縁口縁をもつ。212は大きく外に開く体部をもつ青磁碗である。213は中国産褐釉陶器鉢の口縁部か。口縁端部は内側に肥厚させている。214・215は土師器皿、216は土師器坏である。いずれも底部は回転糸切りで、216は板状圧痕が残る。このほかに瓦、中国系瓦も出土している。遺構の時期としては16世紀代と推定される。

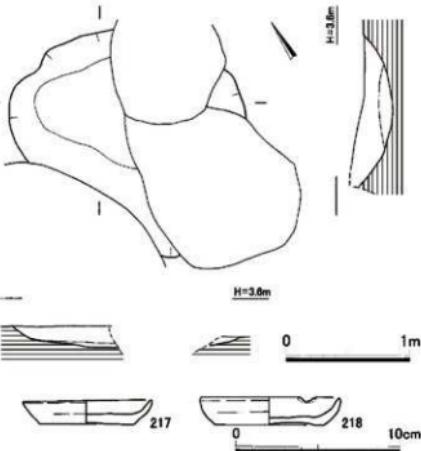
SK107(第30図) 調査区の東側やや北寄りに位置し、I区第2面で検出した。

SK103・104、SE51と重複し、最も古い。平面形は明確ではないが、不整な楕円形とみられ、長軸1.9m、短軸1.3m程度を測り、深さは0.2～0.25m程度である。主軸はN-58°-Wにとる。埋土は暗黄褐色砂質土で、炭化物・焼土粒が少量混じっていた。

出土遺物(第30図) 217・218は土師器皿で、底部はいずれも回転糸切りである。

218の口縁部には一部打ち欠きがあり、灯明皿として使用されたものであろう。このほか、青磁や白磁小片が出土した。ほかの遺構との重複関係と出土遺物から16世紀前葉の遺構と考えられる。

SK48(第31図) I区第1面で検出し、調査区の北側に位置する。平面楕円形を呈し、



第30図 SK107 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)

長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.35~0.4mを測る。主軸はN-50°-Wにとる。西側でSK50と重複し、これよりも新しい。埋土は暗灰色砂質土である。

出土遺物(第31図) 219は白磁椀III類か。小さな玉縁口縁をもつ。220・221は土師器皿である。いずれも底部回転糸切りで、221は板状圧痕が残る。このほかに青磁片や瓦片が出土した。出土遺物は少なく、時期幅もあるが16世紀代の遺構と考えたい。

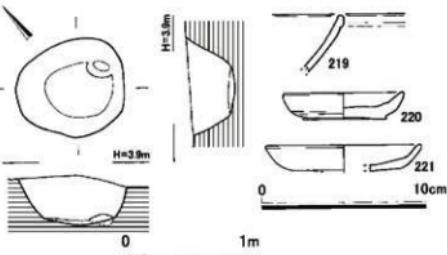
SK87(第32図) 調査区の北側に位置し、I

区第2面で検出した。平面円形で北側は二段、東側は三段掘りとなっている。径1.3m、深さは0.4mを測る。主軸はN-37°-Wにとる。埋土は暗赤褐色砂質土で炭化物を少量含む。

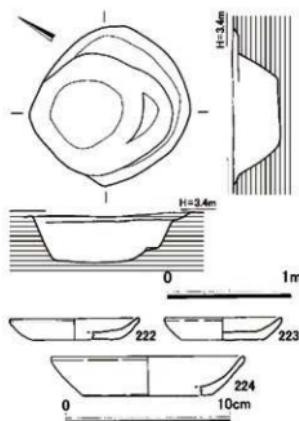
出土遺物(第32図) 222・223は土師器皿、224は土師器壊である。すべて底部回転糸切りで222には板状圧痕が残る。このほかに、青磁片や瓦片も出土している。15世紀代の遺構と考えられる。

SK152(第33図) 調査区中央やや南寄りに位置し、II区第2面で検出した。北東側でSK147と、東側でSK143と重複し、SK143より古く、SK147より新しい。東側をSK143に埋されているが、平面形は円形を呈しているものとみられ、径0.8mほどであろう。深さは約0.2mを測る。主軸はN-25°-Eにとる。埋土は暗黄灰色砂質土である。

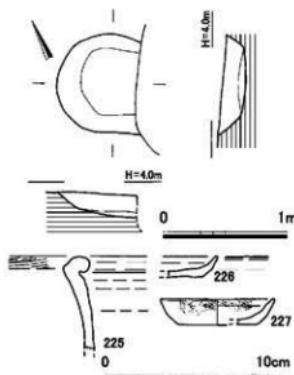
出土遺物(第33図) 225は焼締土器壊で、直線的な体部からくの字状に屈曲し、短く丸い口縁部へとつながる。



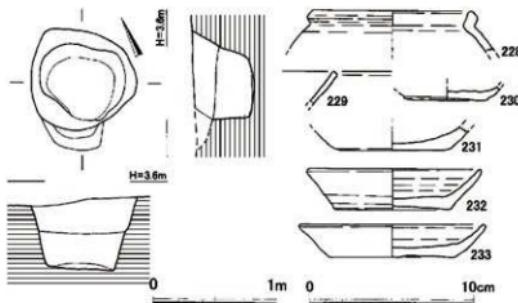
第31図 SK48 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)



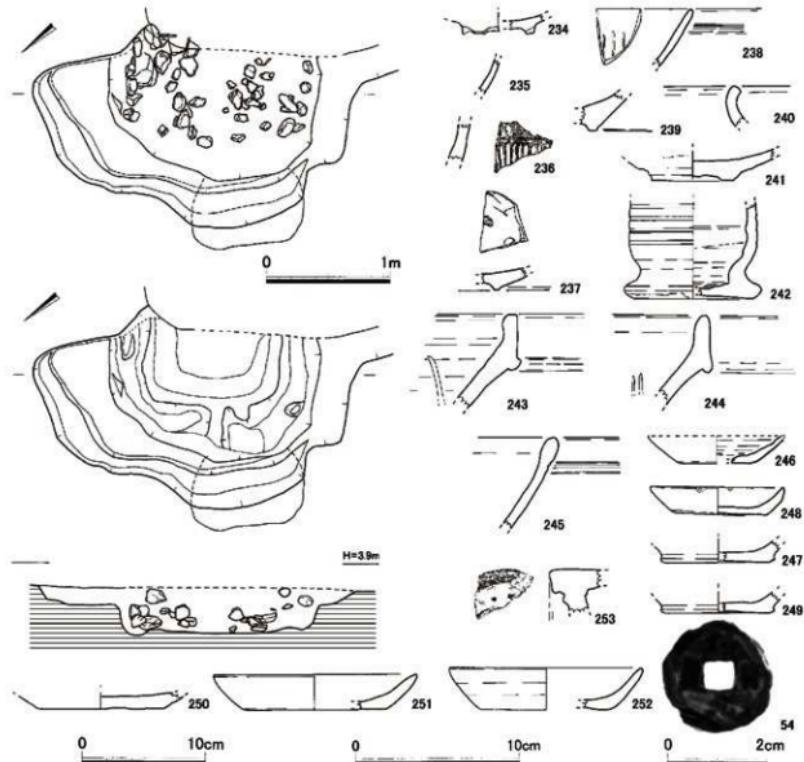
第32図 SK87 実測図(1/40)
および出土遺物(1/3)



第33図 SK152 実測図(1/40)
および出土遺物(1/3)



第34図 SK151 実測図(1/40)および出土遺物(1/3)



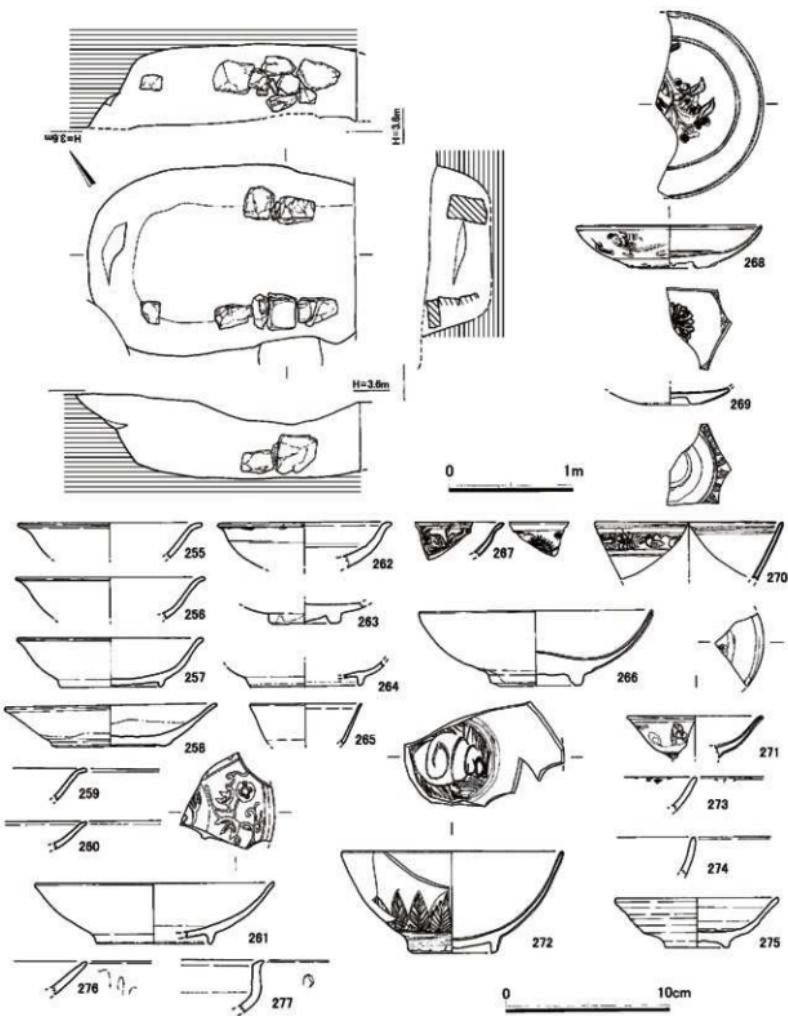
第35図 SK63 実測図(1/40)および出土遺物(1/3、243・244は1/4、254は1/1)

226・227は土師器皿でどちらも底部回転糸切りで、227は内外面の一部に煤が付着し、灯明皿として使用されたものと考えられる。出土遺物から15世紀代の遺構と考えられる。

SK151(第34図) 調査区の南東端に位置し、II区第2面で検出した。平面形は不整な円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.5mを測る。主軸はN-24°-Eにある。上部がやや広がり、下位に向かって少しづばり、中位付近ではほぼ真っ直ぐに掘られている。埋土は黒色砂質土で炭化物を多く含んでいた。南東側でSP141と重複し、これよりも新しい。

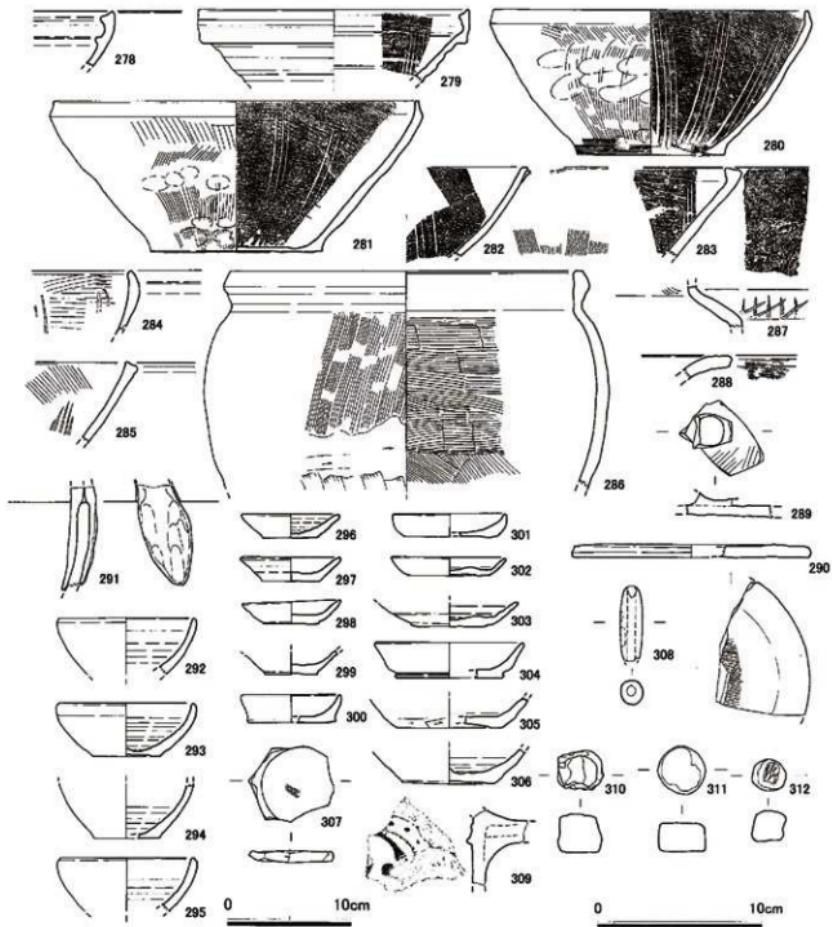
出土遺物(第34図) 228は龍泉窯系青磁の短頸壺か。頸部はわずかに外に開く。229は粉青沙器碗の口縁部か。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部下でやや内湾して口縁部に至る。230・231は土師器皿、232・233は土師器坏である。232の内底はナデ調整が顕著にみられる。底部は全て回転糸切りである。出土遺物から15世紀代の遺構と考えられる。

SK63(第35図) I区第1面で検出した。調査区の東端中央や北寄りに位置する。礫や20~30cm



第36図 SK154 実測図(1/40)および出土遺物①(1/3)

のやや大きめの石に混じって、瓦や陶磁器類が集中して出土し、廃棄土坑と考えた。東側で石積土坑SK62と西側でSK64と重複し、SK64より新しく、SK62より古い。東側はSK62により壊されているが、現状で平面形は歪な長方形で、二段掘り状になっており、長軸は2.65m、短軸1.1~1.25



第37図 SK154 出土遺物②

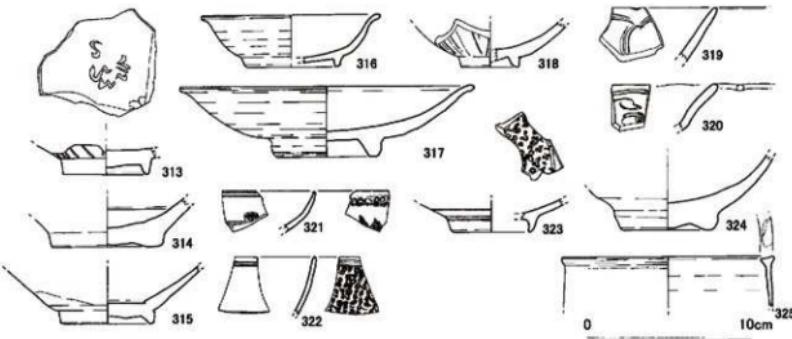
m程度で、浅い部分の深さは0.1~0.15mを測る。礫や遺物が集中して出土した部分は一段低くなつておらず、この部分は平面略長方形で、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ約0.3mを測る。礫・遺物集中部分の外周はさらに溝状に掘り込まれており、幅0.15~0.2m、深さは検出面から0.3~0.4m程度を測る。礫や石の出土状況等も考慮すると本来は石組あるいは石積土坑であった可能性がある。主軸はN-38°Eにとる。埋土は暗灰色砂質土で、炭化物や焼土粒も多く混じっていた。

出土遺物（第35図） 234は森田分類白磁皿C群か。高台の一部のみの小片である。高台は半円形に

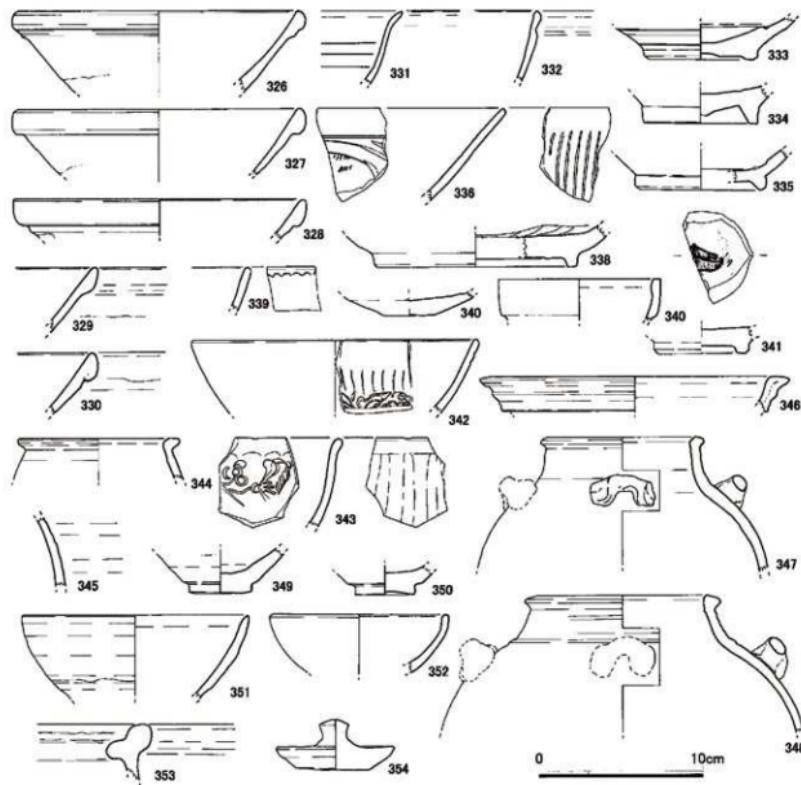
四箇所の抉りが入れられ、抉られずに残った部分は釉剥ぎされている。内面見込みには同型の製品を重ね積みして焼成されたためにできた楕円形の痕跡が残る。235は龍泉窯系青磁碗か。小片だが鍋連弁の一部がみえる。236は龍泉窯系青磁壺の一部か。劍頭連弁文と花文とみられる文様が施される。237は肥前磁器染付皿か。高台疊付は釉剥ぎされ、砂目痕が残る。238はベトナム青磁皿か。釉調は淡い黄白色で、胎土は乳白色を呈する。内面に型押による花弁と草花文が施されている。遺物包含層出土の342と同一個体であろう。239は陶器壺もしくは甕の底部か。日本産ではないと思われる。外面は薄く全体に鉄釉・鉛釉が掛かり、内面は鉄漿が施される。高台は削り出され、断面方形で低い。240は陶器壺の口縁部。内面は頸部以下、外面は口縁端部より下位に灰釉が施される。胎土はやや紫がかった暗赤褐色で、砂粒を多く含む。241は肥前系陶器皿で、内面には灰釉が施され、外面体部下部から高台は露胎である。242は肥前系陶器瓶で花入などか。内外面に灰釉が施されるが底部は露胎である。243・244は備前焼擂鉢で、擂目はやや太く幅の広い櫛目で入れられる。口縁部外面のみ施釉される。245は肥前系陶器擂鉢で、残存部分には全面に鉄釉が施されている。擂目は細く密である。246～249は土師器皿、250～252は土師器坏で、すべて底部回転糸切りである。246の内面には水引き痕が明瞭に残る。248の口縁部には一部に煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。253は軒丸瓦の瓦当で、外周には珠文が配される。254は祥符元寶（北宋・初鑄1009年）とみられるが、錯にも覆われ、また磨滅も著しい。図示したもののほかに、平瓦や明代青花や青磁・白磁片等が出土している。隣接する遺構との重複関係や出土遺物から、16世紀代の遺構と考えられる。

SK154（第36図） 調査区東端やや南寄りに位置し、II区第2面で検出した石積土坑である。西側でSK142・SP155、東側でSD133と重複する。SD133・SP155よりも新しく、SK142よりも古い。東側は調査区外に延びるため、明確ではないが平面は長楕円形を呈し、現状で長軸2.2m、短軸1.5m、深さは0.6mを測る。底面に石積みを確認したが、そのほとんどを失っており、北側では1段分、南側で最大3段分がかろうじて残存していた。埋土は暗褐～暗灰褐色砂質土で、炭化物や焼土粒を多く含んでいた。主軸はN-56°Wにとる。

出土遺物（第36・37図） 255～260・262は白磁森田E群の皿に含まれるもので、外反する口縁部をもつ。251は高台疊付が釉剥ぎされる。258はやや上げ底のタイプで内外面体部上半のみに施釉される。263・264も白磁森田E群の皿底部で、263は高台内露胎、264は高台疊付が釉剥ぎされる。261は白磁皿で、体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外に開く。内面には草花

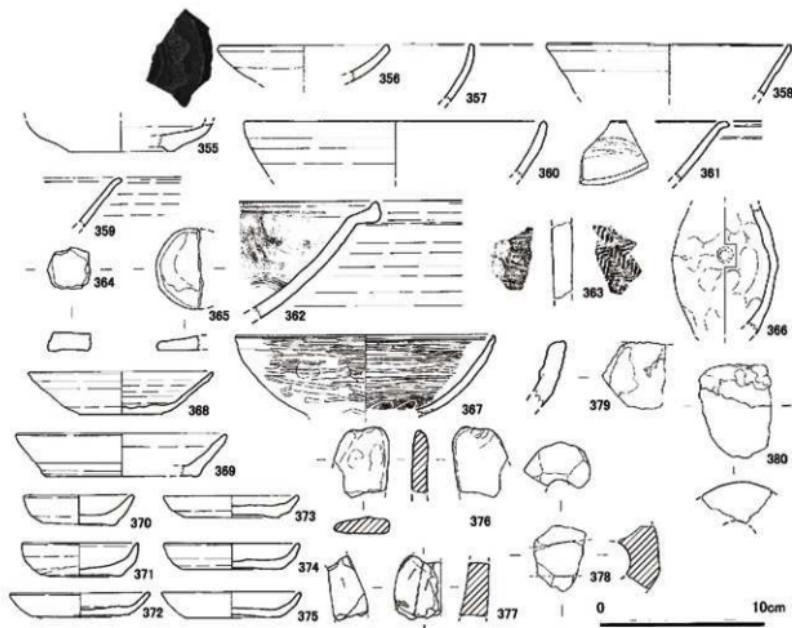


第38図 検出面の出土遺物(1/3)



第39図 遺物包含層の出土遺物①(1/3)

文が印刻される。高台疊付の軸は抜き取られる。265は白磁森田E群の小碗で、器壁は非常に薄い。266は龍泉窯系青磁浅形碗で内面見込みが盛り上がり、穂頭心となる。内外面無文で、高台疊付から高台内は釉剥ぎされる。267~272は明代青花で、267・271は端反小皿、268・269は菖苞底の皿、270・272は碗である。273~275は粉青沙器小皿で、273・274は直口縁、275は端反タイプである。273の口縁部には煤が付着する。275の内面見込みには砂目痕が残る。276・277は肥前系陶器皿・鉢である。278は中国産無釉陶器捏鉢の口縁部。279は備前焼摺鉢で、摺目はやや幅広の櫛描きによる。280~285は瓦質土器摺鉢である。281は4本単位の櫛描きによる摺目が施される。286は瓦質土器壺で、口縁部は外側に肥厚される。体部外面は縱方向、内面横方向の刷毛目調整が施される。287は瓦質土器壺の肩部で、外面にはヘラ状工具による線刻文がある。288は瓦質土器鍋の口縁部か。289・290は土師器の茶釜蓋か。291は土師器鍋で、体部に釣り手が付くもので、粘土帯で体部を挟み、貼り付けている。292~295は土師器小鉢で、内面に水引き痕がよく残る。296~302は土師器皿、



第40図 遺物包含層の出土遺物②(1/3、362・363は1/4)

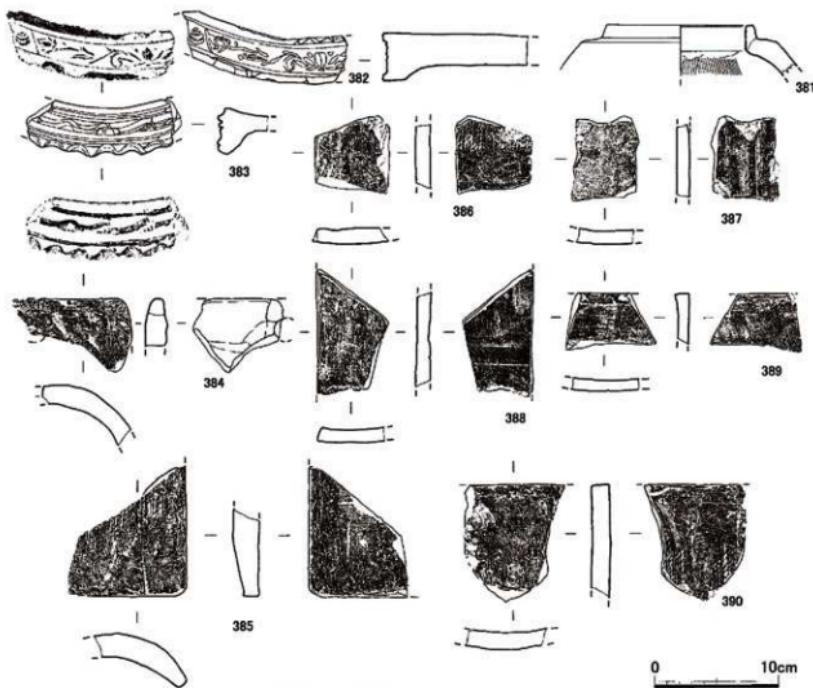
303～307は土師器底である。いずれも底部回転糸切りである。308は土錘で、外面は丁寧にナデ調整される。309は軒丸瓦の瓦当で、珠文と巴文が配される。310～312は瓦玉である。出土遺物には13・14世紀代にさかのぼるものもみられるが、主体となるのは15世紀後半～16世紀のものである。遺構もこの時期のものと考えられる。

3) 検出面および遺物包含層の出土遺物(第38・39図)

ここでは、遺構検査時や遺物包含層掘り下げ時に出土した遺物について取り上げる。

(1) 検出面出土遺物(第38図) 313は白磁碗で、外面は細線文、内面に花文が印刻される。314・315は白磁IV類の底部で、314は高台の低いタイプである。315は内面見込みと体部の境に明瞭な段が付く。316・317は白磁皿森田E群の端反皿で、316は高台疊付は釉剥離される。317は高台内から疊付まで露胎である。318は外面に緩い鶴連弁文が施された碗。319・320は龍泉窯系青磁束口碗で、口縁部は輪花、内面に片切彫りによる花文を有する。321～323は明代青花で321は皿、322・323は碗である。324は雜釉陶器碗で、全体に成形時のケズリが明瞭である。325は中国産灰釉陶器鉢で口縁端部には目跡が残る。

(2) 遺物包含層出土遺物(第39図) 326～330・333～335は白磁碗IV類の口縁部および底部である。331は白磁碗V類、332は白磁碗XI類に該当するか。331の体部内面には極浅いが横方向の沈線が三条施される。336は同安窯系青磁碗で、外面に細線による簡略化された蓮弁文、内面はヘラ描き



第41図 遺物包含層の出土遺物③(1/4)

による花文を有する。337～341は龍泉窯系青磁で、337は皿もしくは盤か。内外面に綴い蓮弁文が施される。高台中央は輪状に釉剥ぎされる。338は楕円縁部で、連弧文が連続する。蓮弁文が簡略化されたものであろう。339は釉が青緑色に発色している。内面には細い柳描文がわずかに確認できる。底部は平底で黒変している。340は合子の身か。口縁端部は釉剥ぎされる。341は楕底部で、内面見込みには片切彫りによる文様を有する。高台内は釉剥ぎされる。342はベトナム青磁か。内面に花弁と草花文が型押しにより施される。釉調は淡い黄白色で、胎土は乳白色を呈する。343もベトナム青磁か。釉の発色はやや悪く、くすんだ灰橙色で内面には草花文、外面は蓮弁文が型押しされる。344は中国産灰釉陶器壺、345は船軸のかかる壺や瓶の胴部か。346は陶器鉢の口縁部か。口縁部は折り返して成形される。鉄軸が施されている。347・348は中国産灰釉四耳壺である。349・350は建窯天目楕で、350の底部はやや上げ底となる。体部下半から高台は露胎である。351は瀬戸焼の天目楕で、外面胴部下半以下は露胎である。352は瀬戸焼の小鉢か。内面は灰釉、口唇部から外面は黒釉が施される。353は東南アジア産の陶器壺・壺の口縁部か。鉄軸を施した後、白化粧土を掛けている。口縁部内側の凹んだ部分は白化粧土が掛からないようにしているため、鉄軸が見えている。354は陶器蓋。これも東南アジアのものか。天井部には白色に発色した灰釉、下部は透明釉が施されている。355は精粉青沙器で、内面底部に象嵌による文様が施される。高台疊付は釉剥

ぎされる。356は粉青沙器小皿で、口唇部は釉剥ぎされ、外面中位から下が露胎である。357～360は粉青沙器碗で、357は二次的な被熱により釉が変質している358・360の釉はやや灰白色、359はやや黄味がかった灰白色を呈する。361はベトナム陶磁端反碗か。灰青色に発色した釉が掛かり、内面には鉄絵による草花文が施されている。362は肥前陶器鉢で、口縁部は「くの字」状に外反する。器胎に白化粧土を塗り、刷毛目による横・縱線・波状文が施され、鉄漿や黄褐色釉を流し掛けている。363は焼締土器である。体部の破片とみられる。外面には連続した山形文がみられる。東南アジアのものか。364は瓦玉、365は瓦質の筋錘車で、穿孔はされていない。366は鉢壺で、中央付近に穿孔があり、全体に成形時の指跡が残る。367は瓦器椀で、内面底部には暗文風のミガキがあり、全面に丁寧なミガキが施される。368・369は土師器壺、370～375は土師器皿である。すべて、底部回転糸切りで、368は水引きの痕が顕著である。376は砂岩質の錘とみられる。377は砥石で、少なくとも2面を砥面として使用している。378は砂岩質の砥石か。矢柄研磨器のような形状である。379は埴堀で、外面には黒・赤・緑色のガラス質が付着する。380は彌羽口である。差し込み部分には金属がべったりと付着する。381は瓦質土器釜や壺の口縁部か。外面は丁寧なナデ、内面は肩部に刷毛目調整がみられる。382は軒平瓦の瓦当で、中央には唐草文があり、向かって左端には宝珠文も配置されている。383は中国系の軒平瓦で押圧波状文が施される。384・385は中国系丸瓦、386～390は中国系平瓦である。多くが、凹面に布目痕、凸面に綱目痕があり、凸面はナデ調整が丁寧なものもある。

IV. 結語

第228次調査の成果について簡単にまとめたい。今回の調査では標高3.6～3.7m程度の第1面、標高3.2～3.5mの第2面の遺構面について調査を実施した。第1面では、中世後期から近世(15～19世紀)、第2面では14～16世紀の所産と考えられる遺構群を検出した。検出された遺構について、主軸方位を比較してみると、近世期の遺構の軸はやや西に振れており、中世とくに検出した遺構の年代で多かった15～16世紀の遺構は近世の遺構よりも東に振れているものが多い印象である。近世の遺構の軸は、現在の街区にはほぼ合っており、「太閤町割」による街区を示すものであろう。また、中世の遺構は、東側に向かって傾斜する地形に制約されたものと考えられる。今回の調査では、溝など区画を示すものが明確には検出できなかったが、溝の可能性のあるものを大胆に繋げてみると、その軸は良く通っており、区画の方向を復元することもある程度可能と考えられる。出土遺物の検討も併せておこなうことと、より詳細な時期ごとの街区や町筋の方位を示す可能性がある。今回の調査では、太閤町割やそれ以前の中世「息浜」の町筋等を検討するうえでの重要な成果を得ることができたと言える。

出土遺物については、近世とくに18世紀以降の遺物が多く、近世前期の遺物はそれほど多くない印象である。また、古代に遡る遺物は須恵器が数点出土したのみであるが、11世紀後半から12世紀にかけての遺物は一定量みられ、調査地が位置する息浜一帯の土地利用が中世段階にはいってから本格化することを示唆するものといつてよかろう。さらには出土遺物の中で目立ったのは、鋳造関連遺物である。溶解炉の炉壁とみられるものや、使用痕のある土製鋳型、埴堀も数点出土している。また、木炭や灰が大量に廃棄された土坑も調査区の西側に多く見られ、さらに近代以降のレンガ積みの炉と考えられる遺構も検出しており、中～近世期から継続して鋳造に関わる人々がこの地に存在した可能性が高い。また、ベトナムやタイなど東南アジア産のものと考えられる陶磁器や土器類も少ないながら見受けられ、豪商達が活躍した息浜周辺の調査でも多く確認されている状況との関連もうかがわれる。

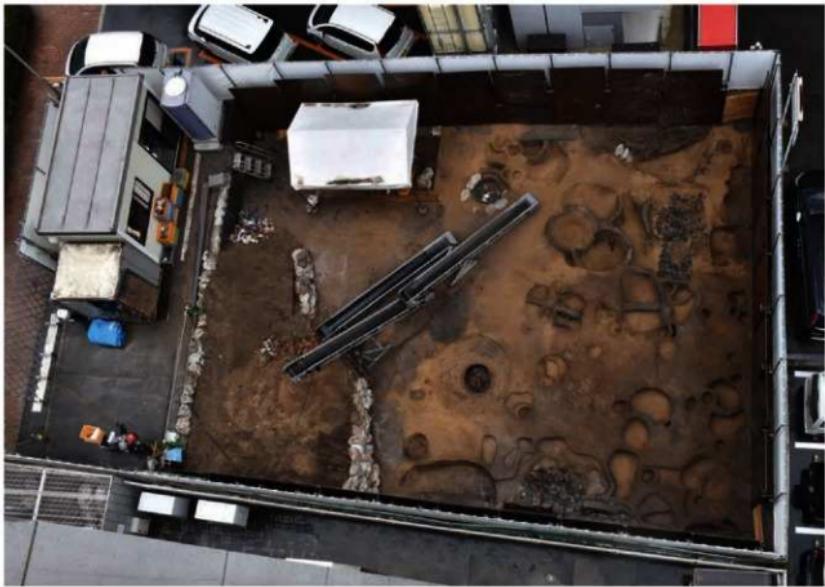


写真1 調査区全景 I 区第1面（東から）



写真2 I 区第1面 近景（東から）



写真3 I 区第2面 近景（東から）



写真4 I 区第2面 近景（北西から）



写真5 調査区北壁土層（南西から）



写真6 調査区全景 II区第2面（南西から）



写真7 調査区全景 II区第2面（東から）



写真8 I区第2面 SX3掘削状況（南西から）



写真9 I区第2面 SX3下層（北東から）



写真10 I区第2面 SK8検出状況（東から）



写真11 I区第2面 SK8半截状況（東から）



写真12 I区第2面 SK28・29・31、SP30・32
掘削状況（南から）



写真13 I区第1面 SK63 掘削状況（北西から）



写真14 I区第1面 SK63 完掘状況（北西から）



写真15 I区第1面 SK62（南東から）



写真 16 I 区第1面 SK62 (南西から)



写真 17 I 区第1面 SK62 (北西から)



写真 18 I 区第2面 SK87 土層断面 (南西から)



写真 19 I 区第2面 SK87 完掘状況 (南西から)



写真 20 II 区第2面 SK154 (東から)



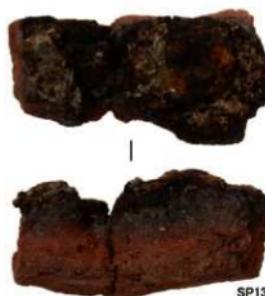
写真 21 II 区第2面 SK154 (北西から)



写真 22 II 区第2面 SP136・SK138・SK137
検出状況 (南西から)



写真 23 II 区第2面 SK138 完掘状況 (南西から)



SP13 出土



33



73



61



196



225



125



281

写真図版7



報告書抄録

ふりがな	はかた 183 一はかたいせきぐん だい228じちょうさほうこく一							
書名	博多 183							
副書名	一博多遺跡群 第228次調査報告一							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1450集							
編著者名	吉田大輔							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
市町村	遺跡番号	33°	130°	20190917	~	160m ²	共同住宅建設 (記録保存)	
はかた いせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかし はかた いせきぐん 福岡県福岡市博多区 なかご みやこまち はかた 中興服町183番	40132	0121	35° 60°	24° 34°	20191029		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
博多遺跡群	集落	鎌倉時代 室町時代 戦国時代 江戸時代	石組土坑、 廐棄土坑、 井戸、柱 穴、小穴	輸入陶磁器、 国産陶磁器、 土師器、須恵器、 鋳造関連遺物、 土製品、 石製品、 金属製品				
要約	<p>第228次調査地は、博多遺跡群が展開する古砂丘のうち、最も海側に位置する「息浜」の東側に立地する。現在の標高は4.9mで、中世段階には砂丘の東側斜面に位置し、南側と東側に向かって傾斜していたと考えられる。</p> <p>本調査では、任意に設定した標高3.6~3.7m程度の第1面、標高3.2~3.5mの第2面の2面の遺構面について調査を実施した。第1面では、中世後期から近世(15~19世紀)、第2面では14~16世紀の所産と考えられる遺構群を検出した。近世以降の搅乱が著しいが、検出した主な遺構は、石組遺構2基、廐棄土坑1基、土坑50基、ピット多数である。遺構密度はそれほど高くなく、近世以降の瓦組井戸以外の井戸は検出されなかった。遺物はコンテナケース40箱程度分が出土し、主な出土遺物は、近世の国産陶磁器、土師器小皿・灯明皿、瓦質土器の火鉢や鍋、人形、瓦等が多く、中世後期の輸入陶磁器(ペトナム等東南アジア産の可能性があるものもある)、瓦、土師器壊・小皿等がある。また、古代の須恵器や12~13世紀にさかのばる輸入陶磁器も少量ながら出土している。</p> <p>検出された石組遺構などの軸はやや東に振れており、町筋の方位を示す可能性がある。今回の調査では、太閤町割遺構やそれ以前の中世「息浜」の町筋等を検討するうえでの重要な成果を得ることができた。</p>							

博多 183

一博多遺跡群 第228次調査報告一

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1450集

2022年3月24日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 宏栄社印刷

福岡市南区清水1丁目10-5

